

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第6集

した　　やま　　古　　墳
下　　山

1989

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県幡豆町は、山を背に前面には海が広がり、山の幸
海の幸に恵まれた風光明媚な町であります。こうしたこと
から、先人の遺産、足跡としての文化財や古墳・遺跡が数
多く所在しております。

このたび愛知県埋蔵文化財センターでは、東幡豆港の
港湾改修事業の一環としての道路の新設工事に伴う事前調
査として、幡豆郡幡豆町大字東幡豆地内の下山古墳の発掘
調査を愛知県の委託事業として実施しました。調査の結果、
古墳時代後期の横穴式石室を主体部とする径16mほどの円
墳で、石室内より数多くの副葬品の出土がみられ当時の
人々の生活や文化に関する貴重な資料・知見を得ることが
できました。ここにその調査結果をまとめ、報告書を作成
しました。本書が広く歴史研究の資料として活用されると
ともに、埋蔵文化財に対する御理解の一助となることがで
ければ幸いです。

発掘調査の実施にあたりましては、地元住民の方々を始
めとする関係各位に格別の御協力と御指導をいただきまし
たことに対し深く感謝申し上げる次第であります。

平成元年 3 月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

理事長 中 根 昭 二

目 次

第1章 序 説	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 位置と環境	1
第3節 調査の方法・経過	5
第2章 墳丘と横穴式石室	9
第1節 墳 丘	9
第2節 横穴式石室	10
第3章 出土遺物	19
第1節 遺物の出土状況	19
第2節 出土遺物	23
第4章 石室使用の石材について	37
第5章 後 論	41
第1節 下山古墳の築造年代について	41
第2節 被葬者像について	42
付 表 出土遺物 登録番号一覧表	48

挿 図 目 次

第1図	幡豆郡幡豆町位置図……………	1
第2図	下山古墳周辺遺跡分布図(I) ($\frac{1}{100,000}$) ……………	2
第3図	下山古墳周辺遺跡分布図(II) ($\frac{1}{25,000}$) ……………	4
第4図	下山古墳位置図($\frac{1}{5,000}$) ……	6
第5図	下山古墳周辺地形測量図 ($\frac{1}{2,000}$) ……………	7
第6図	下山古墳地図測量図 (発掘調査前)($\frac{1}{400}$) ……	7
第7図	下山古墳墳丘および横穴式石室 横断面図(上)縦断面図(下) ($\frac{1}{60}$) ……………	11・12
第8図	下山古墳地形測量図 (発掘調査後地山面)($\frac{1}{200}$) ……………	11・12
第9図	下山古墳横穴式石室実測図 ($\frac{1}{40}$) ……………	15
第10図	下山古墳石室横断面図($\frac{1}{40}$)	15
第11図	下山古墳石室床面実測図($\frac{1}{40}$) ……………	15
第12図	下山古墳組み合わせ式石棺実測図 ($\frac{1}{30}$) ……………	17
第13図	下山古墳石室基底石平面実測図 ($\frac{1}{60}$) ……………	18
第14図	下山古墳遺物出土状態平面図 ($\frac{1}{40}$) ……………	21
第15図	下山古墳出土耳環・玉類・鉄刀他 実測図($\frac{1}{2}$ および $\frac{1}{5}$) ……………	25
第16図	下山古墳出土刀子実測図($\frac{1}{2}$)	28
第17図	下山古墳出土鉄鏃・弓飾金具 実測図($\frac{1}{2}$) ……………	29
第18図	下山古墳出土馬具 (轡実測図)($\frac{1}{2}$) ……………	33
第19図	下山古墳出土須恵器実測図 ($\frac{1}{4}$) ……………	35

第20図	下山古墳石室使用石材の岩質…	38
第21図	下山古墳出土須恵器壺 ・甕類片……………	40
第22図	組合式石棺出土古墳等分布図…	43
第23図	西三河の横穴式石室開口方位…	45

表 目 次

第1表	遺物の出土位置一覧……………	21
第2表	組み合わせ式石棺を有する古墳…	43
第3表	佐久島産石材の使用古墳…………	43
付 表	出土遺物 登録番号一覧表……	48

図 版 目 次

図版一	下山古墳遠景(北より) 下山古 墳遠景(南より)
図版二	発掘前全景(西より) 発掘調査 前(南より) 発掘調査前(東よ り) 作業風景 石室内埋土
図版三	墳丘と石室(南より) 墳丘西部 墳丘東部 墳丘全景(西より) 周 溝埋土
図版四	横穴式石室(第二次床面) 横穴 式石室(第一次床面)
図版五	1～4 遺物出土状態 5 第二次 床面(奥より) 6 組み合わせ式 石棺(南より) 7 第一次床面 (奥より) 8 第一次床面(石 棺取り除き後)
図版六	1 右壁 2 左壁 3 玄室と 羨道部の境 4 左壁(背後より) 5 敷石除去後 6 左壁裏込土 (南より) 7 基底石 8 石 室の掘形
図版七	出土遺物 (1) $\frac{1}{2}$ (18・19のみ $\frac{1}{5}$)
図版八	出土遺物 (2) $\frac{1}{2}$
図版九	出土遺物 (3) 上 $\frac{1}{2}$ 下 $\frac{1}{5}$
図版十	出土遺物 (4) $\frac{1}{2}$

例 言

1. 本書は、愛知県幡豆郡幡豆町大字東幡豆字下山^{したやま}17-11番地ほかに所在する下山古墳^{したやま}の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、愛知県土木部がすすめている東幡豆港の港湾改修事業に伴う事前調査で、県土木部より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた（財）愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は、昭和63年6月から8月にかけてである。
4. 発掘調査は、（財）愛知県埋蔵文化財センター課長補佐土屋利男・同主事北村和宏が担当した。
5. 調査に際しては、次の関係機関の御指導・協力を得た。
愛知県土木部、愛知県教育委員会文化財課、愛知県幡豆郡幡豆町教育委員会、同土木課。
6. 遺物の整理、製図等については、次の方々の協力を得た。（敬称略）
福田啓志郎 加納俊介 柵木えみ子 中島たづ子 蒔田すま子 村田朋子 白頭久代 酒井三芳 福岡恵子 森 真理
7. 石室の石材鑑定は、森 勇一、永草康次、楯真美子による。
8. 調査区の座標は、建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、これを示した。
9. 本書の執筆・編集は、北村が担当した。
10. 調査に関する資料は、（財）愛知県埋蔵文化財センター（〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802番24）で保管している。尚、下山古墳の本センターでの遺跡登録番号は、ⅢHS-63-SZ01である。出土遺物の登録番号については付表（本書48頁）に示した。

第1章 序 説

第1節 調査の経緯

現在、愛知県土木部では幡豆郡幡豆町において東幡豆港の港湾改修事業を継年で実施している。

昭和62年、この港湾改修事業の一環として、下山古墳（幡豆郡幡豆町大字東幡豆字下山地内、県遺跡番号30—60032⁽¹⁾）の位置に道路新設の計画が具体化した。そこで愛知県土木部、愛知県教育委員会文化財課等で協議が重ねられた結果、事前発掘調査を行なうこととなり、県土木部より県教育委員会を通じて委託を受けた（財）愛知県埋蔵文化財センターが調査を担当することになった。

調査は、昭和63年6月1日の伐採に始まり、最終的に同年8月29日石室の解体を行ない現地での調査をおえた。調査面積は500m²である。

〔注〕

(1) 愛知県教育委員会『愛知県遺跡分布図（Ⅱ） 知多 西三河』 1987年

第2節 位置と環境

位 置 下山古墳の所在する愛知県幡豆郡幡豆町は、渥美半島と知多半島に抱かれた三河湾のはぼ中央の沿岸部に位置する。漁業と幡豆石の産出で知られた人口約1万4000人（1988年末）ほどの町である。年平均気温は15～15.5℃、無霜日数240日以上で温暖な気候である。地勢の大半は三河高原から続く標高324.8mの三ヶ根山を最高所とする丘陵が占める。この丘陵は、数条に分かれて海岸に迫り崎山・寺部・中浜（洲崎）などの岬地形をなしている。これらの丘陵間に、南に海を望んで奥行の長い狭隘な小平野が展開している。この小平野は、大きく



第1図 幡豆郡幡豆町（●印）位置図

三つに分けられ、西より「大字鳥羽」^{とば}、「大字西幡豆」^{にしはす}、「大字東幡豆」^{ひがしはす}が概ねこれに対応している。

今回発掘調査を行なった下山古墳は、上記の三ヶ根山より南西方向へ延びたのち南下して海岸に迫り大字西幡豆と東幡豆の境をなす丘陵から東へ派生する一支丘の頂部(標高38.1m)に位置する。地籍で示せば、愛知県幡豆郡幡豆町大字東幡豆字下山17-11番地ほかである。古墳の上に立つと、北に三ヶ根山がそびえ、東には県立児童公園が所在する州崎の丘陵を東壁とし南に海が広がり港を有する東幡豆の小平野が一望される。さらに海上に目を向けると、石室の開口方向に前島(兎島)^{うさぎ}、沖島(猿ヶ島)^{さるが}が、そして天気恵まれれば渥美半島が遠くに展望できるという風光明媚なところに本墳は立地している。古墳の被葬者がこの東幡豆の小平野ないしは海上に関連したであろうことは想像に難くないであろう。

発掘調査着手時の本墳およびその周辺は、第二次世界大戦直後におこなわれた畑地の造成を目的とした開墾により旧状が著しく損なわれ、支丘頂の畑面に突出する奥壁とわずかに露出する側壁とが古墳であることを示しているにすぎなかった。

環境 下山古墳の所在する幡豆郡幡豆町から西隣の同郡吉良町にかけこの海岸部一旧幡豆郡南部一の丘陵上には、60基を数える古墳が分布している⁽¹⁾。その内の大多数は古墳時代後期の円墳と考えられるもので、前・中期の古墳は少ない。



第2図 下山古墳周辺遺跡分布図(Ⅰ) 1/100,000(国土地理院発行5万分の1地形図「蒲郡」による)

- 1 下山古墳 2 正法寺古墳 3 経塚古墳 4 岩場古墳 5 経後古墳 6 穴観音(中ノ郷)古墳
7 とうて山古墳 8 神宮廃寺 9 後田遺跡 10 幡頭神社(式内社)

現在迄の知見でもっとも古い時期に編年されるのは、正法寺古墳（前方後円墳 全長89m 吉良町大字乙川）⁽²⁾および経塚古墳（円墳？ 径30m 同 前）⁽³⁾である。正法寺古墳は、墳形および埴輪（有黒斑 外面調整タテハケ）の特徴からみても5世紀前葉に編年され、経塚古墳も同じ特徴を有する埴輪からみて、ほぼ同時期と考えられる。殊に正法寺古墳は矢作川流域（西三河地方）における最大規模の古墳であり、幡豆郡南部における最も古い古墳である。しかしこれに続いて造営された古墳は径30m前後の円墳にとどまる。

次の時期に位置づけられるものとしては、岩場古墳（円墳一幀立貝式前方後円墳？一径27m 吉良町大字小山田）、経後古墳（墳形・規模不明 吉良町大字乙川）、穴観音古墳（円墳？ 径30mほど 幡豆町大字西幡豆）といった古墳があげられる。岩場古墳⁽³⁾は、「埴輪棺」および「埴輪円筒棺」の出土で著名なもので出土遺物・埴輪の特徴より5世紀中葉に編年される。既に滅失した経後古墳⁽⁴⁾は、無黒斑の埴輪の特徴および「須恵器の平瓶、又は埴のそれと思われる口部」⁽⁵⁾の出土を伝えることから（5世紀半代～）6世紀代に位置づけられるものである。穴観音（中ノ郷）古墳は、出土遺物および横穴式石室の形態からみて5世紀の後半代に位置づけられるもので、東日本における初期横穴式石室として注目を集めている⁽⁶⁾。

ついで6～7世紀代にかけての時期に編年される古墳は多いが、一支丘に10基を越えて群集することはない。この時期における旧幡豆郡南部の特徴としては、三河湾にうかぶ佐久島産の石材を棺材あるいは天井石、側壁材として用いたものが点々と分布し、また組み合わせ式石棺がこの幡豆郡南部から佐久島・日間賀島にかけて特徴的に分布してみられることなどが指摘される。これらは、当該期の湾内交流のあり方を考える上で注目されるのみならず、ひいては「波豆評」の成立前史を究明する上で格好の史料になろうかと考えられる（後述）。

また7世紀代には鳥羽神宮廃寺（幡豆町大字鳥羽）の創建をみる。寺址より所謂「北野廃寺系」の軒丸瓦および重弧文の軒平瓦が採取⁽⁷⁾されている。旧幡豆郡域でこの時期の寺院址は、他に志貴野廃寺⁽⁸⁾（西尾市志貴野町）がみられるのみであり、当該期の文化活動の中心の一端をなしていたことが伺われる。なお海獣葡萄鏡など5面の鏡の出土が知られる後田遺跡は⁽⁹⁾、鳥羽神宮廃寺の南東1.5kmの所に位置している。

以上、下山古墳をとりまく環境ということで、古墳時代を中心とした動向について古墳の分布を中心に大雑把に概観した。下山古墳の造営、被葬者像についての考究は、かかる古墳・遺跡の動向とのかかわりの中で理解される必要があろう。

〔注〕

- (1) 愛知県教育委員会『愛知県遺跡分布図（Ⅱ） 知多西三河』 1987 による。但し吉良町の北部（大字



第3図 下山古墳周辺遺跡分布図 (II) 1/25,000 (国土地理院発行2万5千分の1地形図「吉田」)

- 1 下山古墳 2 小浜古墳 3 講伏古墳 4 西口古墳 5 上畑古墳 6 宮前古墳 7 平山古墳
 8 長根古墳 9~11 谷村三ツ塚第3~5号墳 12 とうて山古墳 13 観音堂古墳 14 和尚塚古墳
 15・16 谷村三ツ塚第1・2号墳 17 根ノ上古墳 18~21 越山第1号~第4号墳 22・23 洲崎山第
 1・2号墳 24 中ノ沢古墳 25 船付古墳 26 丸山古墳 27 洲崎三ツ塚古墳

岡山、瀬戸、駿馬)は除いた。

- (2) 小栗鉄次郎「幡豆郡吉良町大字乙川正法寺古墳」(『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告 第十三』 愛知県 1935) 49—51頁。

なお、昭和60年 吉良町教育委員会によって墳丘の測量調査が行なわれた。

現在、埴輪は吉良町立歴史民俗資料館に保管されている。以下、吉良町内所在の古墳出土資料は同館に保管されているものに依る。

- (3) 池上年「第七 吉良町南部古墳群」(『岩場古墳』吉良町史料第一輯 愛知県幡豆郡吉良町 1957) 31頁。

- (4) 後藤守一・久永春男他『岩場古墳』(吉良町史料第一輯) 愛知県幡豆郡吉良町 1957
川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻第2 1978) 37頁。

- (5) (注3) 池上年論文に同じ、30頁。

- (6) 土生田純之「中ノ郷(穴観音)古墳横穴式石室実測調査報告」(『西三河の横穴式石室 資料編』 愛知大学日本史専攻会考古学部会 1988) 124—126頁。

土生田純之「西三河の横穴式石室」(『古文化談叢』第20集上 九州古文化研究会 1988)

白石太一郎「4 後期古墳の成立と展開」(岸俊男編『日本の古代 第6巻 王権をめぐる戦い』 中央公論社 1986) 218—221頁。

- (7) 幡豆町立歴史民俗資料館保管。

- (8) 西尾市史編纂委員会編『西尾市史二』 愛知県西尾市 1974 5—14頁。

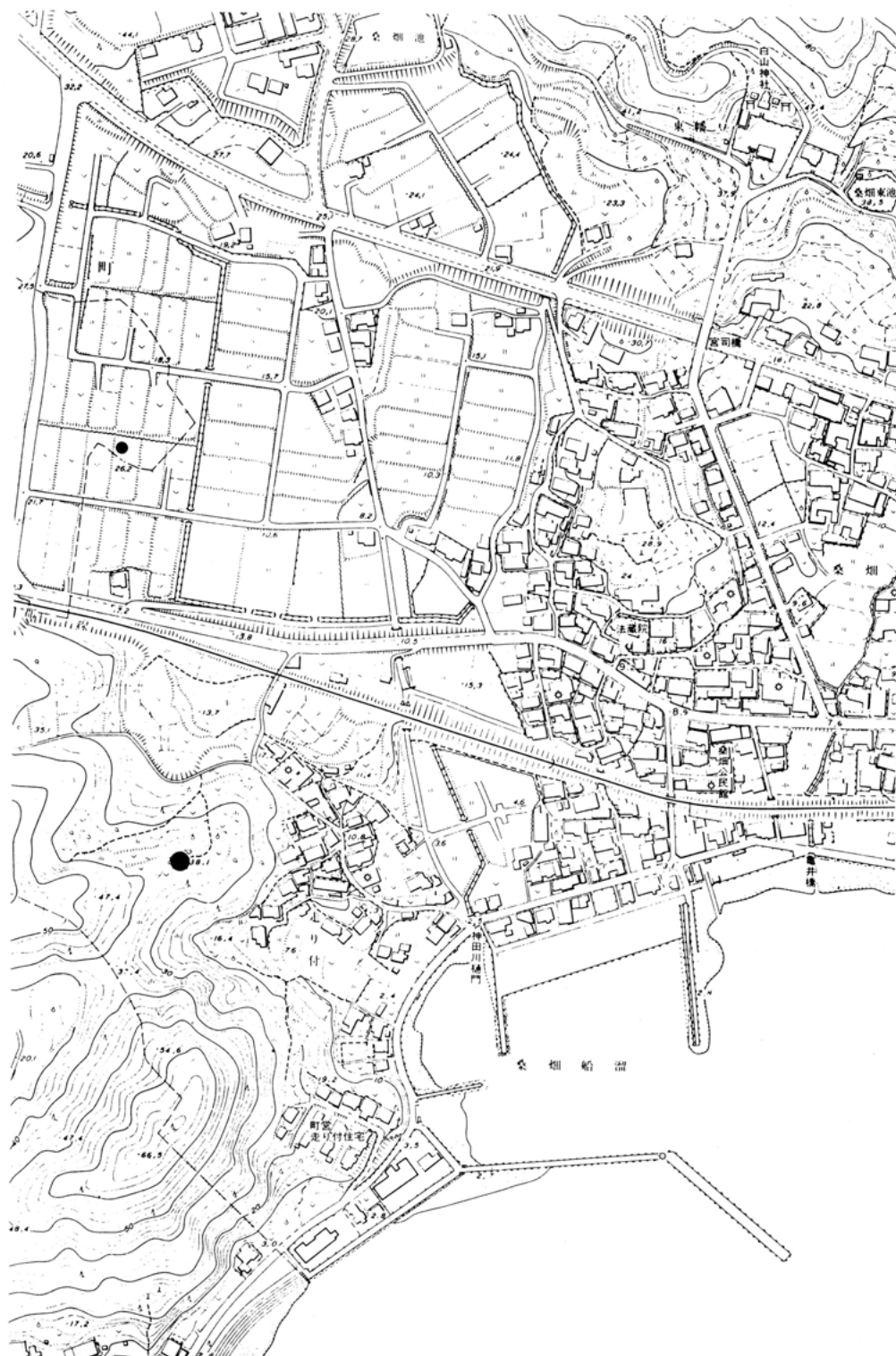
- (9) 宮内庁書陵部『古鏡目録』 学生社 1976

幡豆町誌編集委員会『愛知県幡豆町誌』幡豆郡幡豆町町役場 1958 附重要資料6—7頁, 69頁。

なお、このほかに後田遺跡出土と伝えられる海獣葡萄鏡が二面ある。一つは林福寺(愛知県岡崎市蓑川町 市指定文化財)所蔵のもので、もう一つは小野宗重氏の所蔵になるものである。

第3節 調査の方法・経過

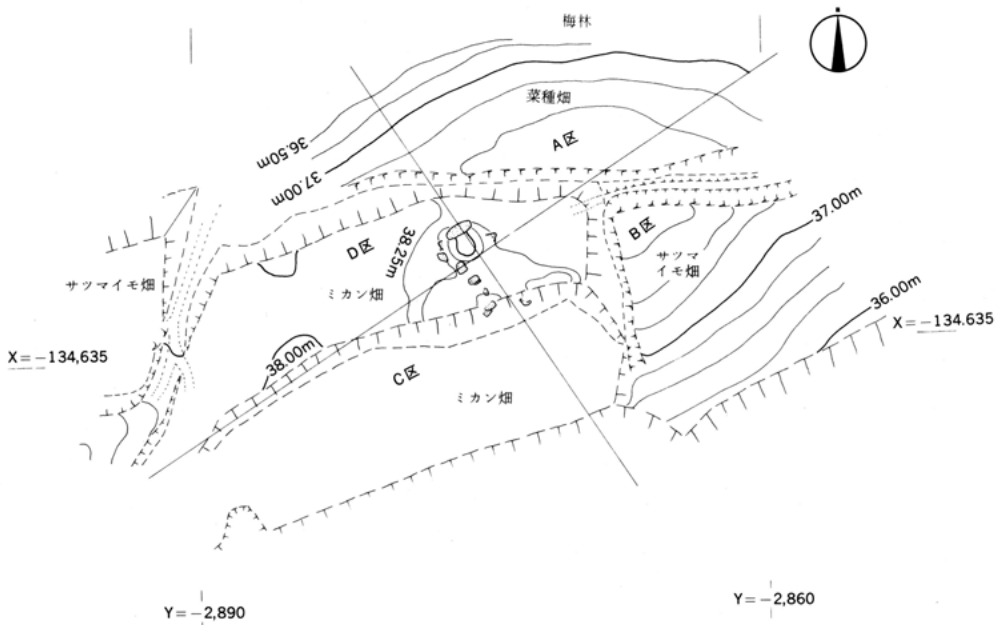
下山古墳およびその周辺は、前述のように開墾により畑となっており、頂部の畑面に石室の奥壁および側壁の一部が露呈している状態であって、墳丘および石室の上部が著しく損なわれていることが予想された。調査着手時の本墳およびその周辺は、用地売却・借地契約の終了後から放置されたため、かなりの雑木林と化していた。そのため調査は、まずこの雑木林の伐採、石室上の集石(石室用材の放置されたもの)の除去からはじめ、つづいて石室を中心とした現況の地形測量を行った。測図の結果、畑の造成により本墳は大きく削り取られているものの、露出する石室を中心に主として西・東方において等高線が円弧を描き、耕作土下に墳丘の一部が存することが予想された。こうした点をふまえて、発掘にあたっては、いわゆる4区分法を採用することとした。区分は、露呈する奥壁・側壁の一部を手掛りとして石室の主軸線を設定して、これを南北の基準線として、これに直交しかつ残存すると予想される墳丘を横断する位置に東西の基準線を設定し、北東部より時



第4図 下山古墳位置図 上：講伏古墳 下：下山古墳 (縮尺 1/5,000)



第5図 下山古墳周辺地形測量図 (縮尺1/2,000)



第6図 下山古墳地形測量図 (発掘調査前 縮尺 1/400)

計回りにA・B・C・D区とした。なお石室の主軸線を基準としたため、南北基準線は真北より33度ほど西へ振ることとなった。発掘は、まず墳丘の築成状況および裾部を確認するためと石室構築のあり方を把握するために、石室内を除いて東西・南北基準線に沿ってトレンチを入れることからはじめた。墳丘については、北基準線、すなわち石室主軸線より7.5mのところまで溝状遺構(S D01)が認められたほかは、腐葉土ないし耕作土の直下において地山面があらわれているという状況で盛土層は認められず、畑の造成に際してかなりの削平をうけていることが明らかとなった。一方石室については、奥・側壁に沿った位置で石室構築のための掘形が検出された。かかる知見をふまえて墳丘についてはトレンチの延長を行なうとともに、A～D区については腐葉土および耕作土の除去を行なった。その結果墳丘の盛土は各区とも認められず、遺構についても古墳の周溝と考えられる(後述)前記S D01のほかは確認されなかった。つづいてS D01の掘り下げとともに、耕作土の除去範囲を稜線上を西方へ広げることとした。一方、石室については基準線に沿って十字に畦を残し、慎重に墳土の掘り下げを行なうとともに、奥・側壁と掘形壁面との間の充填土の掘り下げを行なった。

S D01の埋土は層状堆積を示し位置的にみて古墳の周溝と推察されたが、出土遺物はなく、その年代の特定に課題を残した。また稜線上の拡張した部分についても耕作土の直下が地山面となっており、遺構は認められなかった。

石室については、掘り下げ作業に支障が生じた段階で測図し畦を取り除くという作業を繰り返しつつ、慎重に掘り下げを進めた。上部の著しい損壊にもかかわらず床面は比較的良好に遺存していたが、攪乱や石室上部の破壊時の際の転落石等が所々にみられ埋葬面・追葬面あるいは棺の痕跡の検出は困難を極め、結果的には敷石の重複から少なくとも床面が二面存することを確認したにとどまった。同様に出土遺物についても、原位置か否か、その帰属床面の特定等についても困難をきわめた。床面構造に関して特に問題となったのは、一次床面(後述)の河原石(亜角礫)の間隙から河原石面上においてみられた「玉砂利」の取り扱いであった。即ち、河原石の間隙を埋めるために敷かれたものなのか、あるいは河原石面上にこの玉砂利層を設けていたのかという点である。前述のように攪乱等の関係もあって断言し得ないが、量的にみて全面を敷くには少量であり、間隙を埋めることを主にしていただけと推察されたが、後者の可能性の存立の余地を残しておきたいと考える。

石室内の調査終了後、石室の解体を行なった。基底石までは、石積みの順を記録しつつ解体し、基底石については測図を行なって取りはずした。最後に土坑内の清掃、写真撮影、測図を行ない現場での作業の全てを終了した。なお、解体にあたっては部分的にチェーンブロック使用したものの、約20名で1日弱の作業であった。

第2章 墳丘と横穴式石室

本墳は、南々東方向に開口する横穴式石室を内部主体とする径15.0mほどの円墳(推定)である。以下、本墳の構造について墳丘と横穴式石室に分ちて調査所見を記述することとする。

第1節 墳 丘

既述のように、本墳は畑の造成を目的とした開墾をうけて大きく削り取られていた。調査の結果、石室の北・南・東側の三方については、畑として大きく削り込まれており、盛土、周溝等の墳丘に関する手掛りは何ら得られず(第7図下)、わずかに西側において稜線を断ち割って直交する溝状遺構(SD01)を検出したにとどまる(第7図上)。このSD01は、検出面で幅1.5m、深さ0.6mで上端が大きく開く「V」字状の断面を呈するものである。溝の南端は開墾により滅失しているが、北端については稜線上の途中で岩脈に接して幾分西方へ屈折し終結している(第8図)。遺存長は4.0mをはかる。埋土は層状堆積を示す。出土遺物がなく時期を特定し得ないが、石室を中心に円弧を描く地山面の等高線と溝の方向が概略一致すること、溝の北端の延長上で上記等高線に沿って明確な掘り肩を有しないものの浅い凹みが連続していること等々からみて、このSD01を古墳の西側を画する周溝と推察する。もしこのように考えることが許されるならば、石室の主軸線と溝の中心間で7.50mを測り、本墳は径15mほどの規模の円墳(推定)ということになる。ちなみに石室の主軸線より東方へ7.5mの地点は、石室の位置する畑と一段下った東側の畑との境と概ね一致し、畑の造成に際して墳丘東側の裾部が畑の境(段差)として残された可能性がある。同様に墳丘の高さについて検討を加えてみる。(a)溝底面の標高が37.48m、(b)石室を構築するために穿たれた掘形の標高が38.50m、床面で37.65m、(c)奥壁上端で標高39.58mをはかる。これをもとに算出すると、(a)、(c)より少なくとも2.10mの墳丘高を有していたことは明らかである⁽²⁾。そして(a)、(b)よりそのうちの1.02m分は地山の起伏を充分に利用していたことが知られる。このことに関係して、工法上の問題に起因することかも知れないが、石室構築に際して地山面を穿っている点も墳丘築成に際しての盛土量を軽減化する

工夫の一つと言えるかも知れない。

〔注〕

- (1) 溝状遺構およびそれに連続する浅い凹みの平面プランからみて、取り敢えず「円墳」と推定したが、より仔細にみると西側において一部、石室の主軸線と併行する観があり、墳形については、考慮の余地がある。ここで想起されるのが、本墳の北東1.8kmの地点に存する根ノ上古墳(昭和60年幡豆町教委調査)で検出された周溝である。報告書では、「円墳」としているが、周溝は、正円とするよりは、隅丸方形を呈していると判断されるのである。本墳の周辺での墳丘調査例が少なくこれをもとに言及することは出来ないが、従来「円墳」と見なされてきたもののなかに「円形」よりも「方形」に近いものが存する可能性が示唆される。
- (2) 溝底の値で算出した。溝上端の数値が用いられることもみられる。参考までにそれで墳丘高を算出すると1.63mとなる。

第2節 横穴式石室

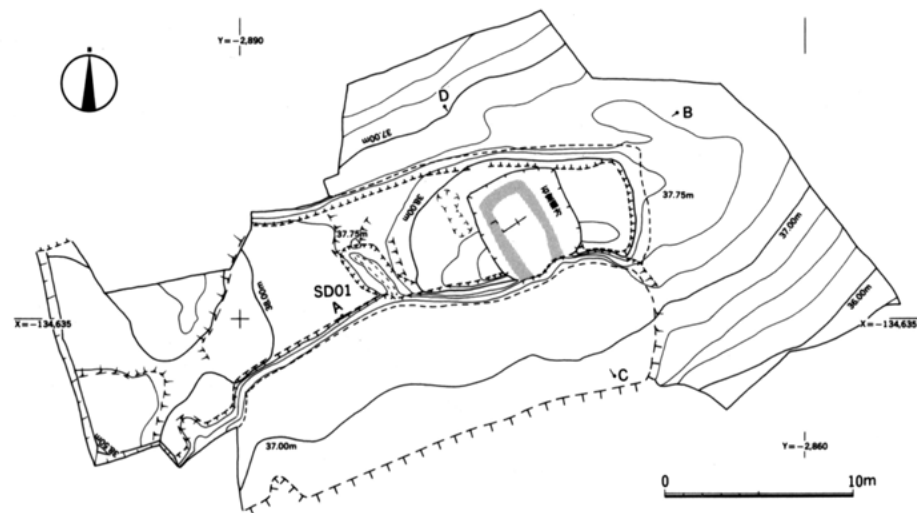
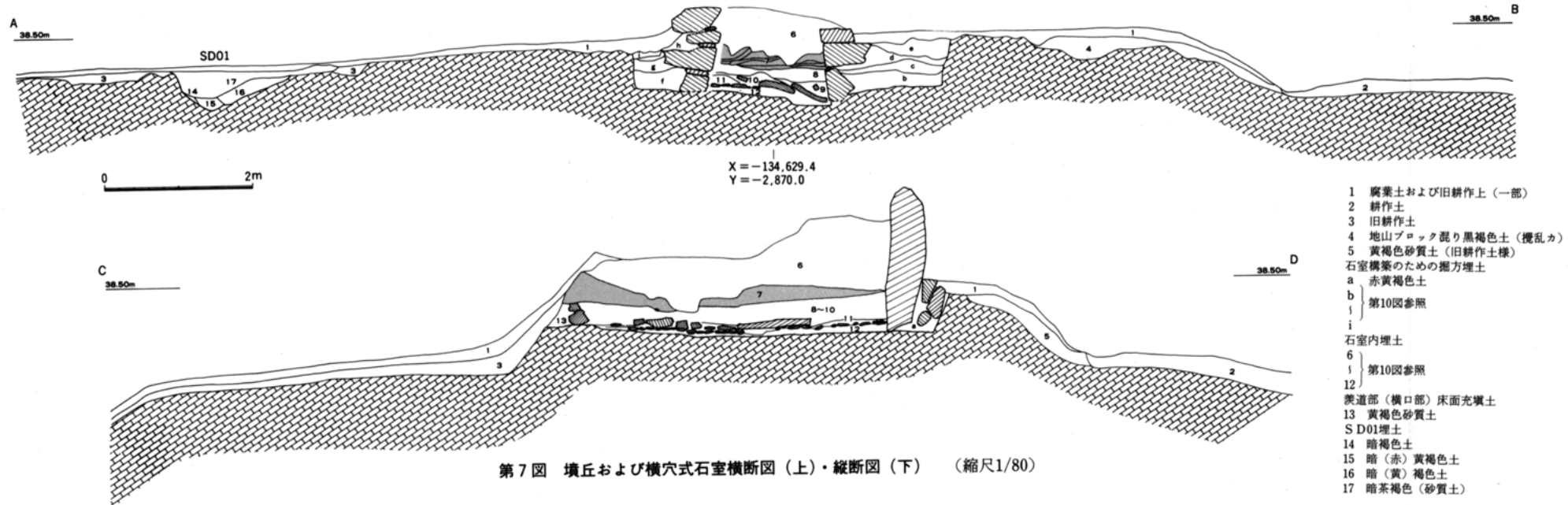
本墳は、南々東方向に開口する横穴式石室を内部主体とする。開鑿により石室の天井部・羨道入口部は失なわれ側壁も上部の損壊が著しいが、玄室床面は比較的良く遺存していた。

石室の掘形 横穴式石室は、地山面を掘削した掘形⁽¹⁾の中に構築されている。石室の位置が床面の中央より幾分西側に片寄っている点は留意すべきであろう⁽²⁾。この土拡は、石室の主軸方向に長い略長方形プランのもので、上端幅4.40m前後(検出面での数値以下同じ)下端幅4.00m前後、石室開口部側の損壊が著しく正確を期せないが長さは、わずかに残る南東隅で下端長6.50mをはかる。断面形は逆梯形状を呈す。右壁面⁽³⁾(右壁の裏面の意、以下同じ)および奥壁面の傾斜はきつく垂直に近いが、左壁面の傾斜は緩やかとなっている。こうした傾斜・掘削角度の相違が何に起因するか定かではない。ただ石室の位置が左壁に寄っていることを加味するならば、石室構築の工法に起因することかも知れない。深さは、左壁面で0.80～0.60m、奥壁面で0.60m前後、右壁面で0.50mをはかる。

石室 石室の平面形は、羨道部と玄室部とが区別されない所謂「無袖式」のものである。詳細にみると、玄室の中央幅が奥壁幅・現存羨道部端幅に較べ幾分幅広となった、すなわち両側壁を弧状に外方に張り出して構成された「胴張り形」⁽⁴⁾を呈している。羨道部と玄室部とは段差を設けることでこれを区別している。現存全長4.65mで、主軸線はE—57°—Sを示す。

玄室 玄室の規模は、全長4.05m、奥壁部幅1.25m、中央部幅1.58m、羨道部内端で1.49mを測る。

奥壁は、大型石(1.92×1.40m、厚さ0.48m)を縦長にして掘形底面に直接立て、底面との間に生じる間隙に小ぶりの石材を詰めて高さ1.80mの垂直の壁面を形成している。奥



壁と掘形内壁との狭い間隙には小ぶりの石を充填している。

側壁は、左右とも3～4段の石積が遺存するにすぎない。ともに大ぶりの石材を見かけ上横長に用いて積み上げており、奥壁近くで奥壁をささえる形でナナメ方向の目地がみられるほかは全体的にヨコ方向の目地がよく通っている。見かけ上としたのは、掘形底面に直接据え置かれた基底石とそれより上位のものとは石材の用法が若干異なるからである（第10、13図）。すなわち、基底石は一部を除き、最長面を内側に面するように用いられているのに対し、上位のものの多くは小口面を内側に向けて奥長に用いているという相違である。かかる積み方をした古墳は各地でみられるものである。

左右壁とも内傾しており、所謂「持ち送り技法」で積まれている。殊に右壁の中央で顕著で、左・右がアンバランスとなっている（第10図）が、これは石室の損壊時に何らかの圧力が加わった結果で、左壁の角度が本来のものであろう。

石材の積み上げ順序については、第20図に石材の前後関係を示した。ここで注目しておきたいのが基底石の配置順序である。すなわち、第13図に示すA・A'石がいちはやく配置されているという点である。このA・A'石の位置を仔細にみると、掘形の底面レベルが開口部に向かって角度を変えて上がってゆく傾斜変換点にあたり、B・B'石でこの傾斜をのぼってC・C'石で再び水平面となる。第一次床面（後述）の敷石端は概ねB・B'石と一致している。一方、第二次床面の敷石は現状の玄室と羨道とを分ける石組に至っているのである。つまり、このAA', BB'石の位置は、第一次床面敷設の時点での玄室と羨道の境であった可能性があり、この意味で両石がいちはやく配置されたとも考えられる。これはあくまでも推測の域を出ないのであるが、一つの解釈として示した。もしこのように考えることが許されるならば、第一次床面での玄室長および後述の羨道部長について、現存値に加減を要することになるのはいうまでもない。

奥壁と側壁とが接する隅部では、両側壁が奥壁をささえる形となっており、奥壁と側壁とにまたがる石材はなく、目地がタテに通っている。

なお既述のように天井部は失なわれていたが、開壟の際に天井石は、持ち出しに苦慮したためか、石室埋土上に割られてはいたが3個体分が放置されていた。復元した天井石はほぼ同大で長さ1.3m、幅0.8m、厚0.6m前後をはかる。

床 面 床面は羨道と玄室の境をなす石組の手前約0.3mを除き全面に円・亜角礫いわゆる「河原石」が敷かれている。これを第一次床面とする。この円礫は径17cm・厚2.5cm前後の大きさのもので、総じて開口部に移るにつれて小ぶりとなる。一部重なっている所もあり、重複関係からみて奥壁より開口部に向かって敷かれたものと推察される。この円礫の間隙を充填するために重ねて所謂玉砂利（径2cm前後）が敷かれている。なおこの一次

面の敷石は、石室の掘形底面上に直接据え置かれていたものではなく、厚さ7～8cm前後の間層（地山土）を有している。

奥壁より2.0m地点から羨道内端にかけての約2.0mにわたって、第一次床面上に若干の間層をもって板状の角礫が敷かれている。これを第二次床面とする。石材は1.0×0.5mほどのものから径0.1mのものまでと大きさのバラつきが著しい⁽⁶⁾。特に最大のものについては、後述の組み合わせ式石棺の蓋石の転用の可能性も考えられたが、厚さ18cmと石棺の側板石に較べ非常に厚手であることからその考えには否定的である。なおこの第二次床面レベルに対応する面を石室の奥半部で検出し得なかった。

石 棺 奥壁より1.0m、左壁に沿って所謂「組み合わせ式の箱形石棺」（以下、組み合わせ式石棺と略称）が検出された（第12図）。石材はいずれも扁平な板石で、特に加工痕は認められない。石材の検出状況からみて、その復元については次の2案がある。すなわち、第1案 石材1・2を石室開口部側の小口板とし、石材3・4を両側板に、石材5を奥壁側小口板とするものである。この案では、長さ1.25m（内法1.00m、以下同じ）、幅0.5m（0.3m）、深さ0.5mをはかることになる。

第2案 石材1・2および5を小口板とし石材3を側板石とする点は第1案と共通するが、石材4を蓋台とするものである。この場合、左壁面を片側の側板の代替とさせる。この案では、長さ1.25m（1.00m）、幅0.5m（0.4m）で、深さ0.5mをはかることになる。なお両案とも石室の掘形床面を床とする。

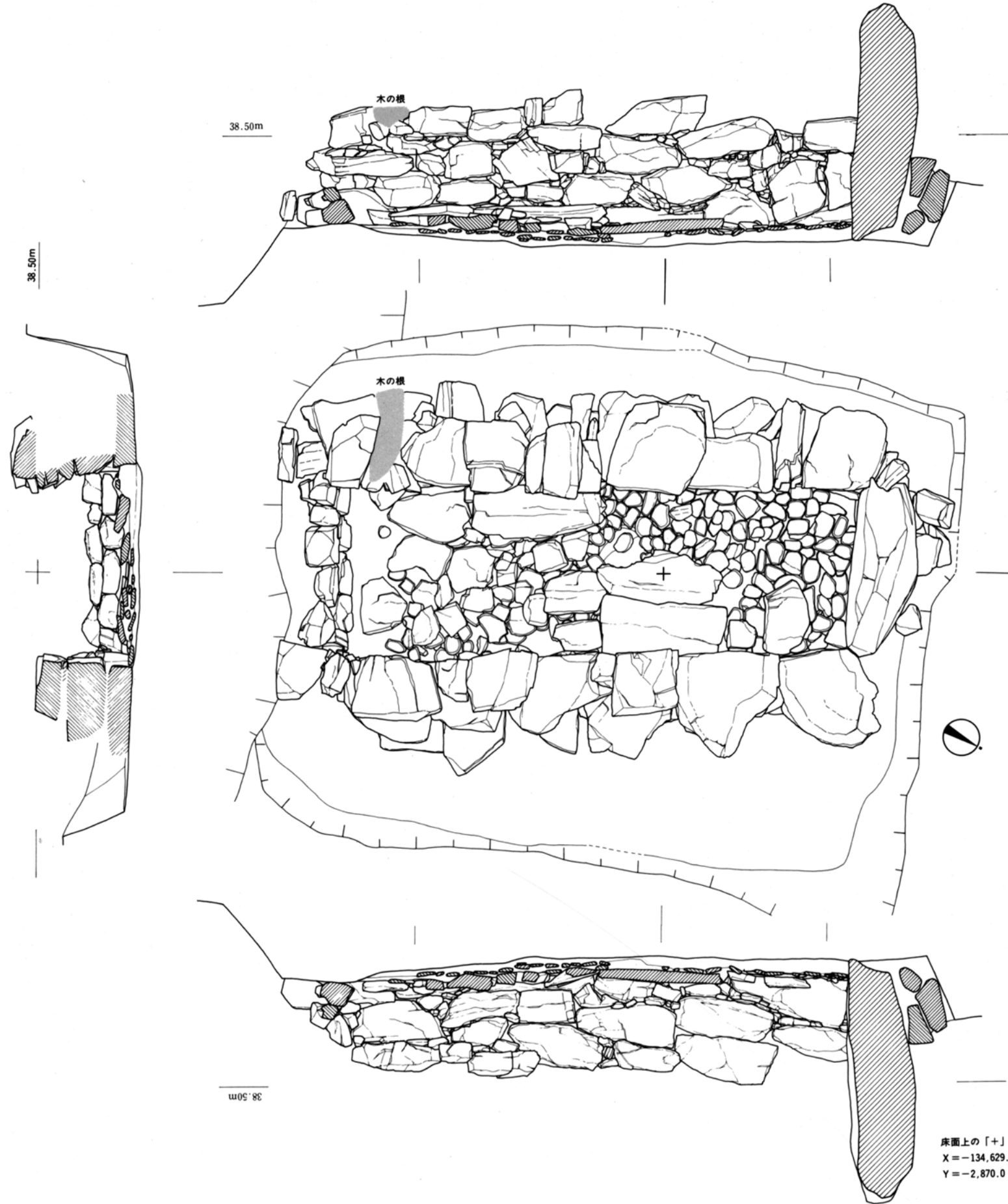
以上、第1案の公算が高いものとするが、幅があまりにも狭くなりすぎるきらいがあり、第2案の存立する余地も残しておきたい。

石棺の設定時期について、まず事実関係を整理してみると――。

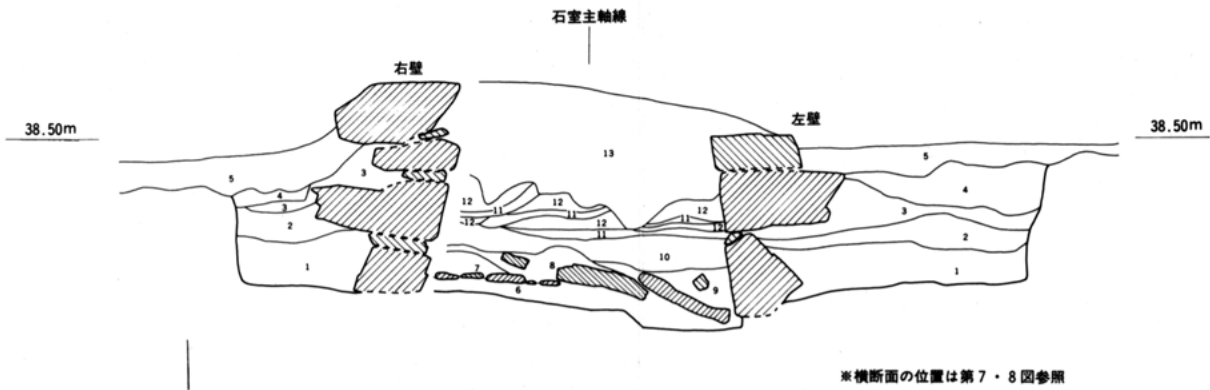
- (i) 石棺の床面は第一次床面に比して約20cmほど低くなっている。したがって第一次床面上に設けられたものではない。
- (ii) 第二次床面の奥壁側の端に石棺の開口部側の小口が接すること。
- (iii) その石棺開口部側の小口板材が第二次床面上に倒れかかっていること。

といった点が指摘される。がしかし、これをもとに設置時期を特定することは出来ない。

羨道部 羨道部⁽⁶⁾の側壁は上述のように玄室と連続しており、平面及び壁面構成上の相違はみられない。羨道部と玄室部との区別は、床面の高低差にあって奥壁から3.55mのところ床面レベルが現存で0.3mほど高くなっている。境の段差部には石材が現存で2段に積み上げられ、一種の壁面が形成されている。側面にまたがる石材がみられないことから、側壁構築後に造作されたものと考えられる。この石組の背後の埋土は遺存状態が悪く、床近くの一部を除き腐食土と化していた。わずかに残る埋土はあきらかに玄室内のものと

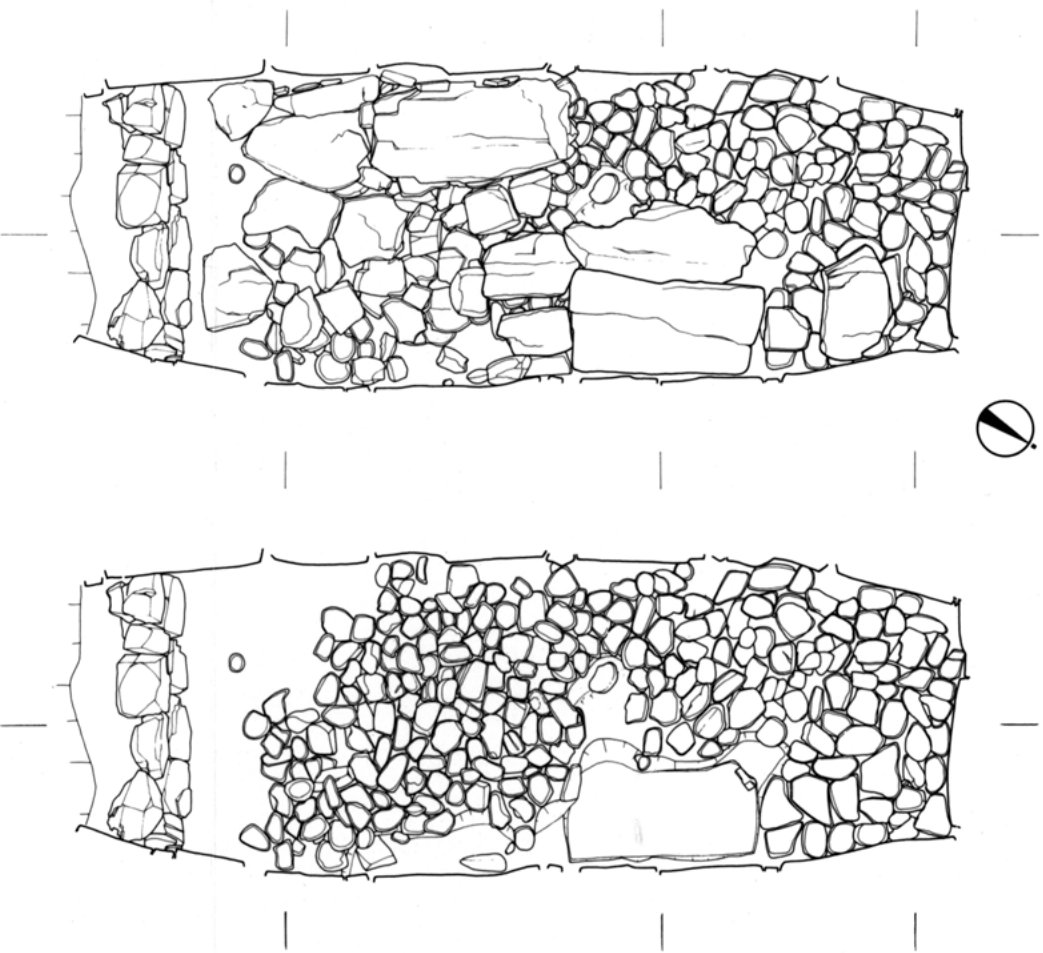


第9図 下山古墳横穴式石室実測図 (縮尺1/40)



第10図 下山古墳石室横断面図 (縮尺1/40)

- 1 黄褐色砂質土
 - 2 赤褐(粘質)土と黒褐色(粘質)土の互層
 - 3 黄褐色砂質土
 - 4 赤褐色土 2条などの黒褐色(粘質)土層が入る
 - 5 腐葉土
 - 6 黄褐色砂質土(第一次床面下)
 - 7 砂利混りの黄褐色砂質土
 - 8 (赤)黄褐色砂質土 やや硬質 第二次床面(敷石)に対応するものか? 但し面的には捉えられない
 - 9 (赤)黄褐色砂質土
 - 10 黄褐色砂質土
 - 11 茶褐色(砂質)土
 - 12 黄褐色砂質土
 - 13 小礫(準大), 炭化物混りの腐食土
- 石室掘方埋土
- 互層をなす



第11図 下山古墳石室床面実測図 上:第二次面(南半)・石棺・第一次面(北半) 下:第一次面 (縮尺1/40)

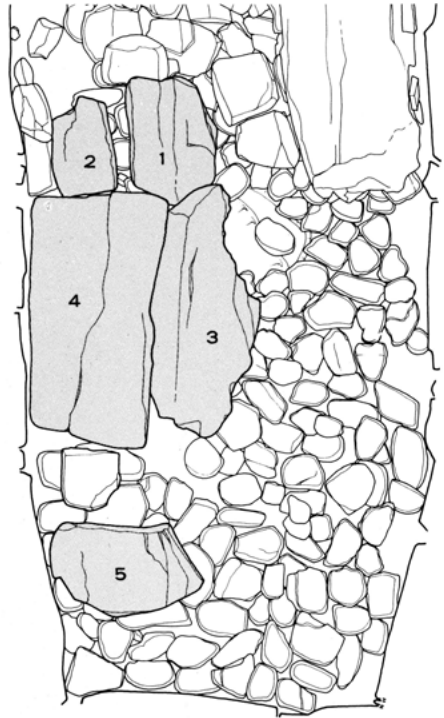
異なり(第7図), また層状堆積ではなく自然堆積土とも考えられない。こうした点から石組以南を羨道部として一段高めることを目的とした充填土と判断した。

規模は, 遺存長0.60m, 幅は玄室側の端で1.49m, 開口部側の端で1.30m(現存)を測る。羨道部床面上には, 閉塞石が積まれていたものとみられ, 玄室の南部の埋土中に遊離した状態で閉塞石の転落と考えられる径20cm大の角礫がままみられた。

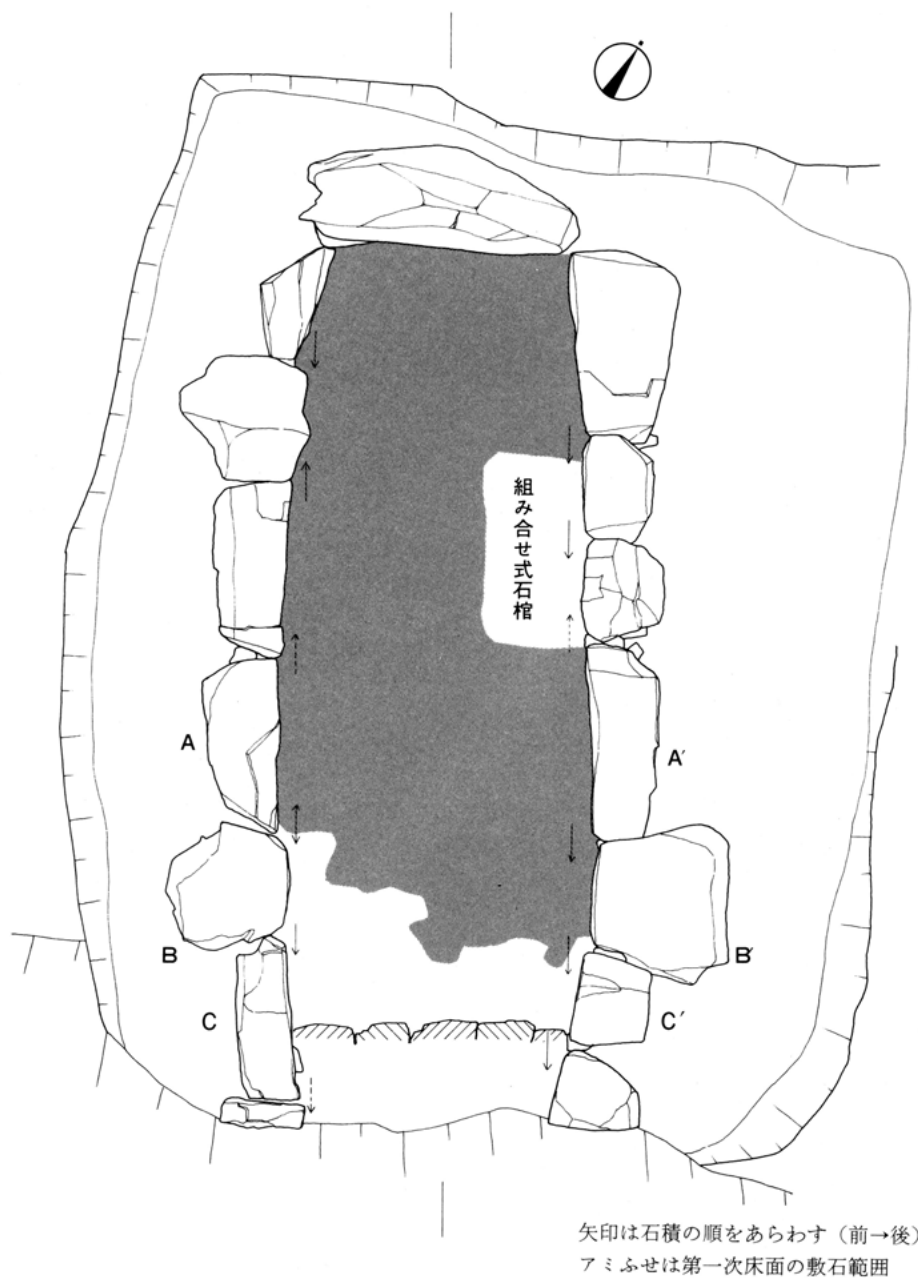
なお羨道と玄室との境については, 二次的なもので, 当初はこれより0.5mほど玄室側のところに設けられた可能性もある(本書13頁)。

〔注〕

- (1) 便宜的に「石室の掘形」としたが土坑, 墓壇などと呼称される場合もあり, 現在のところ名称の統一をみない。今後の課題である。
- (2) かかる事例を県下にもとめるならば, 根ノ上古墳(幡豆郡幡豆町大字東幡豆), 子ムリ古墳(豊田市東山町), 水源山南古墳(豊田市水源町), 山洞第2号古墳(豊田市東保見町)などにおいて認められる。
 幡豆町教育委員会『愛知県幡豆郡幡豆町根ノ上古墳・講状古墳発掘調査報告書』1986年
 豊田市教育委員会『豊田市埋蔵文化財調査集報 第1集 古墳Ⅰ』1974年
 愛知県教育委員会他『水源山南古墳』1988年
 豊田市教育委員会『愛知県豊田市山洞二号・三号墳発掘調査報告書』(豊田市文化財業書 第六)1983年
- (3) 石室の側壁の左右は, 奥壁より開口部をみたときの左右で示す。
- (4) 尾崎喜左雄「横穴式石室編年への一考察」(『史学会報』5 1954年)
- (5) このように敷石は大型で扁平な石を用いる例としては, 根ノ上古墳(前掲注(2))があげられる。
- (6) 羨道部としたが, 後述のように本石室を「堅穴系横口式石室」と認定するならば, 「横口部」とすべきものである。



第12図 下山古墳組み合せ式石棺 (縮尺1/30)



第13図 下山古墳 石室基底石平面実測図 (縮尺 $\frac{1}{40}$)

第3章 出土遺物

遺物はいずれも横穴式石室の玄室内より出土した。出土遺物の品目、数量等は下記の通りである。

耳環（銅芯銀板張鍍金環状耳飾） 1個

管玉 1個

ガラス製小玉 5個

鉄刀 2口（内1口は鉄製の鍔、鍔を装着）

鉄製鍔片 2個（同一個体か）

鉄製鍔片 1個

鉄鏃 18本（以上）

鉄製弓飾金具 3個

鉄製刀子 5口

「刀子皮袋鞘の鉄製縁金具」 1個

轡（鉄製素環鏡板付轡） 2組

器種を特定し得ない鉄器片 4個

小鉄片 多数

須恵器 9個以上（平瓶1 提瓶1 直口壺1 甗1 無蓋高杯1 杯蓋1 杯身3
壺・甗類の胴部片19）

土師器 1個（碗1）

第1節 遺物の出土状況

前述したように石室内の調査の結果、第一次床面及び第二次床面として2面の敷石の床面が確認された。しかしながら、例えば石室南半分にのみ認められる第二次床面に対応する面を北半で確認することが出来なかった—奥壁近くの第一次床面のレベルは第二次床面のそれとほぼ同じとなっている点は注意しておく必要がある—ことなど必ずしも埋葬面、追葬面の検出が充分ではあったとはいえない難いきらいがあり若干の問題を残した点は留意しておかなければならないであろう。加えて遺物のほとんどが敷石面と遺物の間に数センチ

前後の土層を有しての出土であり帰属床面の特定に主観が入る余地が多かったこと、さらには、馬具(46—cd)が第一次床面上0.5mのところ出土をみたことに伺われるように石室内攪乱を受けており副葬された当時の状態で出土したと考えられる遺物は極めて少ないものとみられる。この様に遺物の出土状態についての問題点をふまえた上で、多分に感覚的なきらいがあるが、発掘時の所見を基に各遺物の出土位置について整理したのが第1表である。表の作成にあたっては、(i)およそ敷石上10cm前後までのものをその床面の帰属とし、(ii)レベル的にみて第一次床面か第二次床面か判然としないものについては、そのままとした。(iii)さらに石室南半部では第二次床面上10cm、北半部では第一次床面上15cmを越える位置で出したものを上部出土として示し、排土のふるいがけの際に見い出されたものについては排土中の欄に示した。

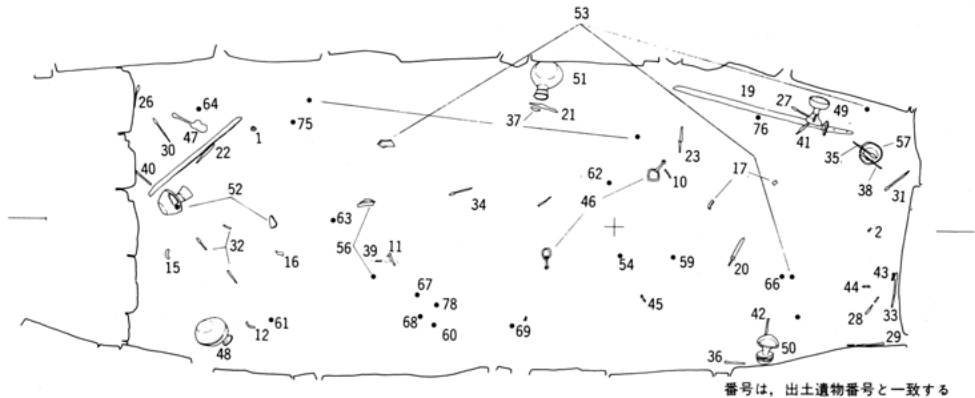
このようにして整理してみると、まず第一に指摘されることは、遺物の大多数が第一次床面から第二次床面にかけてのレベルで出土していることである。そして、第一次面出土のものが第二次面のものよりも量的に多くなっている。これは、石室北半部において、第二次面に対応する面を認め得なかったことに関連するのかも知れず、断言し得ない。第二に、出土地点の面的広がりを見ると、奥壁直前から奥壁寄りの両面側壁に沿った部分、及び羨道側近くの床面上に集中しており、一方奥壁手前から右壁寄りの部分、石棺の部分、第二次床面上の羨道部側を除いた部分(殊に北西隅の大型扁平石上)においては遺物の少ないいわば空白域近い様相となっている。しばしばこうした遺物の出土をみない部分に「棺」の存在を想定する意見がみられる。かかる解釈例に立つならば、奥壁の手前から右壁寄り部分、組み合せ式石棺、第二次床面の北西隅にある大型扁平石の上が「棺」の位置として有力となる。しかしながら、石棺を除きほかに「棺」の存在を傍証するものがない故に、本墳ではあくまで仮説としてとどめておくべきであろう。

ついで遺物の種類ごとのあり方についてみる。

まず耳飾・玉類からみると、耳飾(1)は玄室南部の第二次床面上部で、管玉(2)は奥壁中央手前の第一次床面直上で出土し、ガラス製小玉(3～7)はいずれも石室北部の床面近くの排土の篩かけにより採取されたものである。従って管玉に原位置の可能性が存する他は二次的に動いているものと判断される。ついで鉄刀、鐔、鍔についてみると、鉄刀(19)が鐔・鍔を装着のままで奥壁寄りの右壁に沿った位置で、切先を開口部に、刃を主軸方向に向けて第一次床面上で出土した。刃身の一部が錆化により欠損するが遺存状況がきわめて良好で、二次的移動を受けた様子はなく原位置の可能性が強い。鉄刀(18)は、玄室南西部の第二次面床上で、切先を北に、刃を西に向けて刃身を主軸に対して斜交する位置で出土した。茎部を欠くが、もし茎部が遺存していたとするならば、玄室と羨道部と

の境の石組と交わるようになってしまうことからみて原位置ではないものと判断する。鐔(15, 16)はともに小片で、玄室南部の第二次床面および上部で出土、位置的には鉄刀(18)に近い。鍬(17)は、鉄刀(19)の主軸線側第一次床面上で二箇所に分れて出土。本来、15・16と17は刀身と組み合うものであることから判断して、二次的移動を受けているものと考えられる。

刀子及び「刀子の皮袋鞘縁金具」についてみると、まず刀子(20)が石棺の北側、第一次床面上で刃を開口部に、切先を右壁方向に、茎を左壁方向に一主軸線に刃身が直交一向



第14図 下山古墳 遺物出土状態平面図 (縮尺 1/40)

第1表 遺物の出土位置一覧

遺物	出土	第一次床面	第一次・第二次	第二次床面	上部	排土中 (ふるい)
耳環					1	
管玉		2				
ガラス製小玉						3～7
鉄刀		19		18		
鉄製鐔片				16	15	
鉄製鍬		17				
鉄鍬		26 27 28 29 31 33 35 36 37 38 41 42	30 39 40	25 32	34	
鉄製弓飾金具		43 44			45	
鉄刀子		20 21 23 (24)	22			
刀子皮袋鞘の鉄製縁金具		(8) (9) 10				
轡		47			46	
不明鉄器		13			11 12 14	
須恵器		48 49 50 51 52			53 54 55 56 58～78	
土師器		57				

けて出土した。刀子(23)は、鉄刀(19)の切先部と石棺との間の第一次床面上で20と同様の方向で出土した。この20の主軸線側0.1mのところで「皮袋鞆縁金具」(8~10)の出土をみた。刀子(21)は、同じく鉄刀(19)の切先より開口部方向に0.6m、右壁沿いのところの第一次床面上で切先を奥壁に、刃を右壁に向けて出土。刀子(22)は、玄室の南端部の第二次床面上、鉄刀(18)のやや下位で、切先、刃部の方向を併行させて出土。刀子(24)は、石室中央やや開口部寄りの第一次床面下(状況からみて小動物の生活痕と考えられる空洞。)で切先を開口部方向へ、刃部を左壁方向へ向けて出土した。24は二次的に移動した公算が高いが、他については原位置か否か判断し難い。ただ刀子(23)と「皮袋鞆縁金具」(8~10)が近接した位置で出土した点は、(8~10)の用途を考える上で注目される。

鉄鏃は玄室北半(奥・側壁に沿った部分)及び南部にまとまって出土した。しかしながら身部の方向など鉄鏃の向きは様々で、例えば35・38は土師器碗(57)の上に重なっているが方向は逆となっている。積極的に原位置であると判断し得るものはなく、これから鉄鏃の「群」、「セット」関係を捉えることは出来ない。弓飾金具は、43・44が奥壁手前の第一次床面上で近接して出土し、45が44より1.1mほど開口部側のところ、石棺材直上で出土した。43・44は原位置に近いかも知れない。

馬具については、轡B(47)が玄室の南西部、第一次床面をなす敷石の南端に外接した石室の掘形床面上で出土し、轡A(46)は玄室の中央やや北寄りの埋土上部で銜と素環とがそれぞれセット(46-a・b, c・d)で出土した。轡Aが二次的に移動をうけたものであることは明らかであるが、轡Bについても敷石上にない点を考えると原位置の可能性は極めて乏しい。

用途・器形を特定し得ない鉄器片(11~14)については、13が鉄鏃(29)に接して左壁に沿って第一次床面上で出土した他は、いずれも石室南半部の埋土上部からの出土であり、二次的移動を受けたものである。

須恵器については、高杯(49)が鉄刀(19)の鏑部に重なって立位で出土し、甗(50)は石棺の北側左壁に沿った位置で注口を上に向けて出土。ともに第一次床面上での出土である。提瓶(51)は、第一次床面上で右壁に沿い、かつ第二次床面の北端に外接する位置で口を上に向けて出土。平瓶(48)は、玄室の南東部の第二次床面上で、転倒し天地逆となって出土。同じく直口壺(52)も主軸線近くの第二次床面南端部で、転倒し口縁を奥壁に向けた状態で出土した。

これら須恵器について、原位置か否かは判断に苦しむところであるが、調査時の所見では、完形であることなどからみて高杯については原位置の公算が強いものの、甗・提瓶に

については口縁（端）部を欠くことから二次的移動をうけた可能性があり、長口壺・平瓶についてはほぼ完形であるものの大きく転倒していることからみて、やはり二次的移動の可能性を認めるべきであると判断しておきたい。そのほか杯類（53～56・58）及び壺・甕類の破片（59～78）は、いずれも石室埋土（上部）より点々として出土した。

土師器の椀（57）は、玄室の北西部隅第一次床面上で出土した。口縁端に鉄鏝（35・38）が重なっていた。極めて脆弱な器壁にもかかわらず完形である点を考慮するならば原位置とみることが出来よう。

第2節 出土遺物

以下、順を追って出土遺物の説明を加えていく。遺物番号は挿図・図版とも共通である。

耳環（第15図1 図版七）

耳環は1点みられる。肉眼観察による限りでは銅芯に薄い銀板を張り、その上に鍍金を施す所謂「銅芯銀板張鍍金」のものである⁽¹⁾。環体の断面は真円形ではなく、部位により幾分異なるが、八角形前後の多角形を呈している。錆化が進み、銀板の約半分ほどが欠落し、表面の鍍金は拡大鏡を通して辛うじて看取されるという具合で、遺存状態は悪い。

長 径	短 径	断 面（巾×厚）	重 量
3.2 cm	2.8 cm	0.8 × 0.9 cm前後	23.244 g

管玉（第15図2 図版七）

管玉は1点みられる。両端部の径がほぼ同大の円筒形のものである。穿孔は二方向から行なわれており、ともに開口部が広く奥へいくに従い巾狭となっている。この二孔は、真中より幾分片方へ寄った所で若干のズレをもって合致している。表面は平滑に磨かれている。材質は、流紋岩質凝灰岩⁽²⁾で極めて薄い緑褐色と白色の鉱物が互層をなし美しい縞模様を呈している。尚この縞模様は孔に対して平行している。

長 さ	径	重 量	穿 孔	材 質
1.9 cm	0.5 cm	0.772 g	両 面	流紋岩質凝灰岩

ガラス製小玉（第15図3～7 図版七）

所謂ガラス製小玉は5点みられる。法量、形態からみて3と4～7に大別される。3は透明感の無い濃紺色コバルトブルーのもので、上・下端は直線的で側面は幾分胴張りを呈し、略対称形と

なっている。孔の平面形は、ほぼ正円である。4～7は、3に較べ不整形である。4、5、6は透明感のある^{スカイブルー}淡青（緑）色のもので、7は透明感のない^{イエロー}黄色のものである。これらは径が0.4cm程で、長さは0.22～0.35cm程と3に較べ小形である。いずれも上、下端は曲線であつ側面は非対称形、孔の平面形は略正円形となっている。

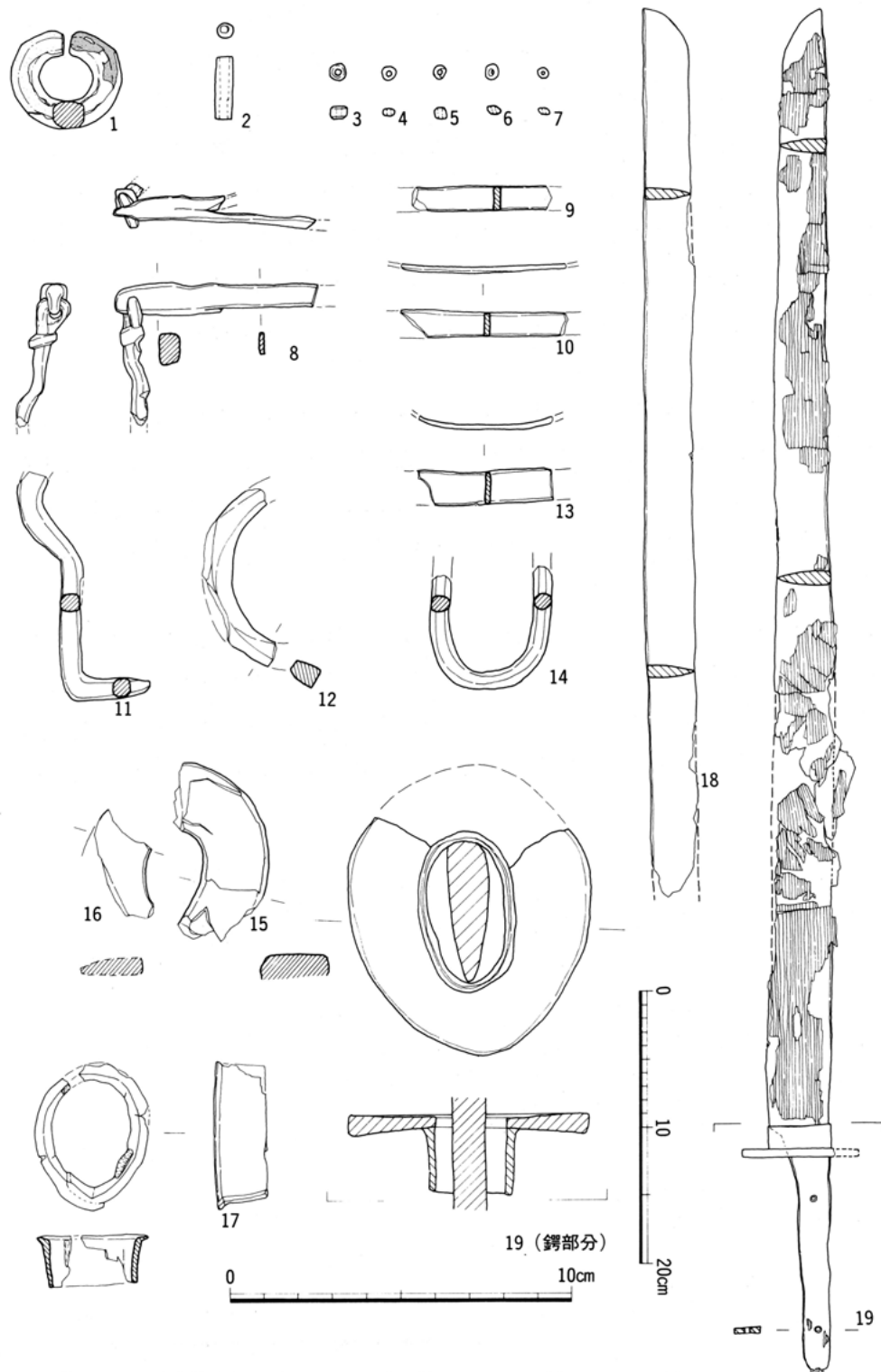
次に製法的一端を知る手掛りとなるガラス内の気泡のあり方を観察すると、透明感の良好な、4及び6において、小さな気泡が孔に対して平行に連なっていることが看取される。これより、少なくとも4、6については所謂「引き延し技法」によるものである公算が高いと言えよう。なお、ガラスの材質については未検査。

遺物番号	長さ (cm)	径 (cm)	重量 (g)	色 調	備 考
3	0.40	0.50	0.121	濃紺色	一部欠損
4	0.22	0.40	0.032	淡青(緑)色	
5	0.30	0.40	0.071	〃	
6	0.35	0.40	0.060	〃	
7	0.25	0.40	0.053	黄 色	

鉄 刀（第15図18・19 図版七）

鉄刀は2口みられる。この他に鉄製の鏢片2個(15, 16)——同一個体か——鏢1個(17)がみられる。鉄刀2口の内の1口(19)は鉄製の鏢・鏢が着装されたままであり、もう1口(18)は、長さ65.1cmほどの刀身の残欠である。従って上記の鏢・鏢は鉄刀(18)と組み合うものであった可能性もあるが、後述のように大きさからみて少々無理が伴う。こうした点より、鉄刀の数は厳密には「2口以上」とすべきであろう。

鉄刀19は、刀身の一部、切先より55cmほどのところで錆ぶくれにより折損している箇所を除きほぼ完形である。鉄製の鏢・鏢が着装されたままにある。長さ100.4cm、刃長82.4cm、刃幅3.5～4.5cm、背厚0.9～1.0cmを測る平造りの直刀である。刃身は切先にいくにつれて巾狭となり、切先はふくらを有する。茎は、長さ18.0cm、幅4.5～1.7cm、と元幅に較べて茎尻が極めて巾狭なものとなっている。茎尻端は丸味をもって終っている。関は背関は認められず刃関のみである。刃関は、鈍角(約125度)に直線的に1cmほど切り込まれている。目釘穴は、茎元より5.4cmのところ及び茎尻方向へ9.6cm離れた箇所の合わせて二孔認められる。ともに茎幅のほぼ中央に位置する。目釘は遺存しない。茎元側目釘穴の所には巾1×1.5cm厚さ1.0cmほどの灰(白)褐色の付着物がみられるが、分析は行っていない。鏢は、径4.3×2.6cmの断面が楕円形(倒卵形)で、幅2.1cm・厚さ0.2cm前後を測る。鏢側の端部がわずかに外反して開き、この端部内面が鏢に接している。鏢は上部の一部失なわ



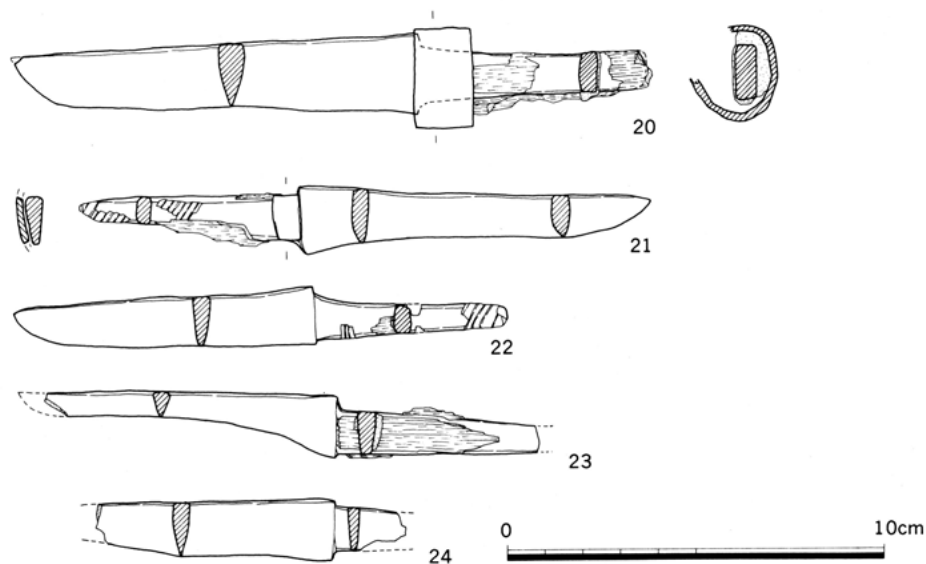
第15図 下山古墳出土 耳環・玉類・直刀他 実測図 (縮尺1~17: $\frac{1}{2}$ 18・19: $\frac{1}{5}$)

れているが、倒卵形で径8.4(復元推定)×7.0cm、内縁の径4.0×2.2cmを測る。外縁の厚さは0.65cm、内縁の厚さは0.2~0.3cmで、外縁・内縁の縁端断面は直線的であるが、外縁のそれは幾分丸味を有している。

刀身の所々に木質の付着が両面に渡って認められることから、木鞘に収められていたものと考えられる。尚、茎の両面にも木質の付着が看取されるものの、刀身に比べ極めて少ない。鐔の内面に木質の付着が認められるので木製の把が想定されるが、ただ上記目釘穴付近の灰(白)褐色を呈する付着物の存在からみて、単純に木製の把を想定するには幾分不安を残す。現時点では間に合わなかったが、後日付着物の分析を待って結論するべきであろう。

鉄刀18は、切先より65.1cm(現存長)までの平造りの直刀と考えられる刀身部片である。刃幅3.6cm、背厚0.8~0.9cmを測り、刀身は、上記鉄刀と異なって、現存部分に関する限り、切先にうつるにつれて刃幅を減じることはない。切先はふくらみを有するが、鉄刀19に比べ直線的である。刀身に微量ながら木質の付着をみることから木鞘に収められたものと推察する。

この他に、鉄刀に関するものとして上述の様に鉄製の鍔1個、鐔2個がある。鍔17は、径4.3×3.3cmの倒卵形で幅1.6cm・厚さ0.15cmを測る。下端に鉄板の合せ痕が認められる。全体的に径が巾広であること、内面の一部に木質の付着が認められることから、「鍔」とするには若干の問題を持つが、一端が短く外反しており前記鉄刀(19)の鍔の形状に類似し



第16図下山古墳出土 刀子実測図 (縮尺1/2)

ていることから鋤として扱うこととした。破片の接合によるものである点を考慮したとしても外径から厚さを減じた内径の $3.2 \times 2.3\text{cm}$ という大きさは鉄刀18に組み合うものとする
ことについては否定的といわざるを得ない。

鍔片15・16は、共に細片であり、かつ遺存状態も悪いためその復元に正確を期せないが
両者の形状、出土位置からみて同一個体である可能性がある。残りのよい15を基にした推
定部位に16を配置した。推定値として示せば外径 $6.3 \times 5.0\text{cm}$ 、内径 $3.3 \times 1.3\text{cm}$ の倒卵形
のものとなる。これよりすれば、背厚 $0.8 \sim 0.9\text{cm}$ 、刃幅 3.6cm の鉄刀18に装着されたものとする
には幾分大きさが足りない感があるが、無理すれば差し込めないこともない。復元値な
ので断定は差し控えたい。

鉄刀子（第16図20～24 図版九）

鉄製の刀子は5点みられる。20～22はほぼ完形で、23、24は切先及び茎尻の一部を欠く。
これらの形態は様々である。20、21、23、24の刃は切先へ向って内側をえぐる緩い曲線を
えがいている。これは使用による砥ぎ減りの公算が大である。関は全て両関であるが、背
関が深いもの（22、23）、刃関が深いもの（24）、両者がほぼ等しいもの（20、21）とに分
けられる。また切先については、現存のもの全てがふくらをもつが、20については直截形
に近い。

把（柄）は、遺存状態の悪い24を除き、いずれも茎の両外面に木質の付着をみることから
木装と考えられる。関近くの茎の断面形状は、21、23、24がクサビ形に近い逆梯形で、20、
22は方形を呈するという相違がある。20、21には把縁金具がみられる。遺存状態の良好な
20の金具は径 $2.6 \times 1.8\text{cm}$ 、幅 1.5cm 、厚さ 0.2cm で楕円形を呈する。21、22には木装の下地
と考えられる繊維質の「太巻き」が認められる。

尚、いずれも刀身部に木質の付着は認められないが、20には片面に布目の付着が認めら
れる。この布目については未分析で、その由来についても副葬に際し刃身に布を巻いたこ
とによるものか、布地を有する他の副葬品或は被葬者の衣類等の付着によるものか定かに
し得ない。

遺物番号	全 長	刃部(長×幅×背厚)cm	茎 (長さ×幅×厚)	備 考
20	16.6	$10.6 \times 2.1 \times 0.7$	$6.0 \times 1.0 \times 0.5$	把縁金具
21	15.1	$9.2 \times 1.8 \times 0.4$	$5.9 \times 0.7 \times 0.4$	把縁金具
22	(13.0)	$(7.7) \times 1.7 \times 0.4$	$(5.3) \times 1.2 \times 0.4$	
23	13.0	$8.0 \times 1.5 \times 0.5$	$5.0 \times 0.8 \times 0.4$	
24	(8.2)	$(6.3) \times 1.6 \times 0.5$	$(1.9) \times 1.1 \times 0.3$	

「刀子皮袋鞘の鉄製縁金具」⁽⁴⁾(第15図8～10 図版七)

幅0.6cm, 厚0.15cm, 長さ(現存)5.7cmほどの鉄板を合わせて, 端より1.5cmほどまでを叩き合わせ本体(現存長6.0cm)とし, さらに端部0.7cmほどを叩き薄くし, 穴を穿ち径0.3cmほどの針金(鉄棒)を通し振って(現存4.0cm)腰佩のための金具としている。第15図9, 10も形状等からみて同一個体と判断される。なお9, 10は合わさって出土した。

鉄 鏃(第17図25～42 図版八)

鉄鏃は18本(以上)⁽⁵⁾みられる。刃部を欠くものを除き大別すると広根鏃(I)と細根鏃(II)に分けられる。

広根鏃(I)は1本(25)のみの出土である。刃から頸にかけての一部が欠損している。全長は推定で12.0cm(現存長9.7cm)を測る。刃長も推定で4.0cm(現存長1.7cm), 刃幅は2.3cm(反転復元), 刃厚0.4cmで片丸造り。関は直角関。頸部は, 頸長3.1cm, 頸幅0.9cm, 頸厚0.4cmで断面は方形, 下端の関部に長さ0.5cm, 幅0.2cmほどの方形突起⁽⁶⁾が認められる。茎は長さ4.9cm(略完存)で断面は方形を呈す。口巻は糸(あるいは繊維の細かい木皮か)で, 木質の下には下地の繊維質の太巻きが認められる。

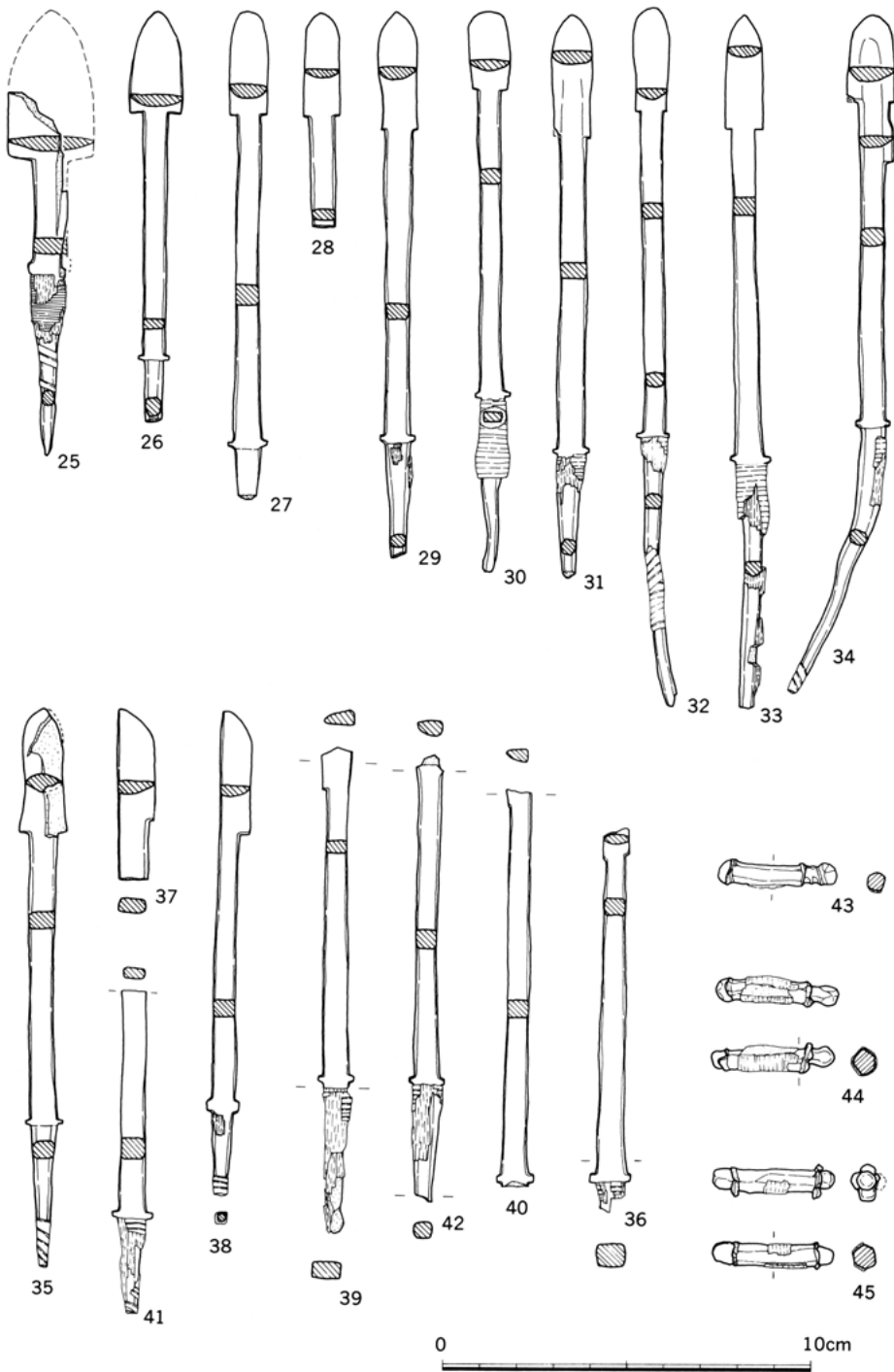
細根鏃(II)は全ていわゆる長頸鏃である。両刃のもの(II a 26～36)と片刃のもの(II b 37～40)に分けられる。

両刃のものはさらに, 刃部の形態によりさらにII a₁～a₂の4種類に分けられる。すなわち

II a₁ 刃部が長三角形を呈するもの(26)全長11.3cm刃部は刃長2.8cm, 刃幅1.4cmで片丸造り, 関は直角関。頸部は, 頸長6.8cm, 頸幅0.5cm, 頸厚0.3cmで下端の関部に長さ0.15cm, 幅0.1cmの方形突起がみられる。茎は断面方形で現存長1.7cm, 刃長 頸長は, 1 2.4である。

II a₂ 両側縁が平行する, いわゆる剣身形のもの(27～33)。比較的遺存状態の良好なもので全長19.0cm前後。刃部は刃長2.8～3.2cm(30は2.2cmであるが, 端部が丸いことから先端が失なわれているものと推察される。), 刃幅0.8～1.1cm, 刃厚0.4cm前後でいずれも片丸造り。ただし, 31については片平造りの可能性もある。頸部は頸長8.3～9.1cm, 頸幅0.6cm前後, 頸厚0.5cm前後で, 下端の関部に長さ0.15～0.2cm, 幅0.15cm前後の方形突起が認められる。茎は遺存状態の良好なもので茎長7.3cmを計る。断面は方形であるが刃部に近いほど長方形で端部に近づくにつれ正方形～円形に近い形状となる。口巻は木皮巻で(30, 31, 33), 木質(29～33)の下に下地の繊維質の太巻きが認められるものがある(32, 33)。刃長 頸長は1 3前後である。

II a₃ 両側縁が内側へえぐられるもの(35)。全長15.3cmを測る。刃部は, 刃長3.4cm,



第17図 下山古墳出土 鉄鏃・弓飾金具実測図 (縮尺1/2)

刃幅は最大で1.3cm, 最小で1.0cmと中ほどが巾狭, 刃厚0.5cmで両丸造となっている。関は直角関に近いが幾分鈍角。頸部は, 頸長7.9cm, 頸幅0.7cm, 頸厚0.5cmで下端の関部に長さ0.1cm, 幅0.1cmほどの方形突起がみられる。茎は現存長3.9cmで, 断面は方形。下地の繊維質の太巻きがみられる。刃長 頸長は1.2.3である。

II a, 長三角形の刃部の下に, 逆刺様の片刃のつくもの(34)。全長18.6cm。刃部は上位の長三角形の刃長2.2cm, 刃幅1.3cm, 刃厚0.3cmで直角関, 下位の片刃は, 刃長1.8cm, 刃幅0.2cm前後, 刃厚0.3cmで直角関。いずれも片丸(平?)造りとなっており全体で刃長は4.0cmを計る。頸部は, 頸長7.2cm, 頸幅0.6cm, 頸厚0.5cmで下端の関部に厚さ6.15cm, 幅0.1の方形突起がみられる。茎は大きく曲っている。おそらくは弾力性を有する時に外圧が加わった為であろう。現存長7.4cm。断面方形, 口巻は木皮巻で, 木質の一部も遺存している。刃長 頸長は1.3.8である。

II b 片刃のものは4本(37~40)みられる。38を除き遺存状態が良くないが, 刃長は3.0~3.3cm, 刃幅0.7~1.0cm, 刃厚0.3cm前後を測る。37・38は共に切先にふくらを有するが直截形に近い。いずれも片丸造り。頸部は, 頸長7.5~10.3cm, 頸幅0.6cm, 頸厚0.5cmで, いずれも下端の関部に長さ0.2~0.3cm, 幅1.5~2.0cmの方形突起がみ

遺物 番号	全 長(cm)	刃 部 (cm)	頸 部 (cm)	茎部長(cm)	重量(g)	備 考
		身×幅×厚	長×幅×厚			
25	(9.7)	(1.7)×(1.5)×0.4	3.1×0.9×0.4	(4.9)	7.8	I 方形突起
26	(11.3)	2.8×1.4×0.3	6.8×0.5×0.3	(1.7)	10.7	IIa ₁ "
27	(13.3)	2.8×1.05×0.4	9.1×0.7×0.5	(1.4)	16.7	IIa ₂ "
28	(5.9)	2.8×1.0×0.2	(3.1)×0.6×0.3	—	4.9	IIa ₂
29	(14.9)	3.2×1.0×0.3	8.5×0.7×0.4	(3.2)	18.9	IIa ₂ 方形突起
30	(15.2)	2.2×1.0×0.3	8.5×0.6×0.4	(4.7)	11.5	IIa ₂ "
31	(15.3)	3.4×1.1×0.4	8.6×0.8×0.4	(3.3)	16.7	IIa ₂ "
32	(19.0)	2.9×1.0×0.3	8.8×0.6×0.3	(7.3)	14.7	IIa ₂
33	(18.9)	3.2×1.0×0.3	9.1×0.7×0.5	(6.6)	20.1	IIa ₂
36	(10.5)	(0.8)×0.7×0.25	8.9×0.6×0.4	(0.8)	13.4	方形突起
35	(15.3)	3.4×1.3×0.5	7.9×0.7×0.5	(3.9)	15.7	IIa ₃ "
34	(18.6)	上2.2×1.3×0.3 下1.8×0.2×0.3	7.2×0.6×0.5	(7.4)	19.4	IIa ₄ "
37	(4.6)	3.0×1.0×0.3	(1.6)×0.8×0.4	—	5.0	IIb
38	(13.0)	3.3×0.8×0.3	7.5×0.6×0.5	(2.2)	10.6	IIb方形突起
39	(13.2)	(1.1)×0.8×0.4	8.1×0.7×0.4	(4.0)	11.3	IIb "
40	(10.8)	(0.5)×0.7×0.3	10.3×0.6×0.5	—	12.3	IIb "
41	(8.7)	—	(6.2)×0.7×0.6	(2.5)	8.5	— 方形突起
42	(12.2)	—	9.0×0.6×0.5	(3.2)	12.3	— "

○数値は最大値, 但し, 頸部幅については中央での値。

○重量については, 正確を期せないが

○()は現存値。

参考値として示した。

られる。茎部は、遺存状態の良好なもので現存長4.0cmを計る。断面は方形。口巻は木皮巻(39)で、木質の下に下地の繊維質の太巻きを有するもの(38)がみられる。刃長・頸長は遺存状態の良好な38で、1/2.3となるが、この38は頸長のもっとも短いものであり、頸長が8.0cmを超えるものは、頸部の比率がより高くなる公算が大である。

そのほかに帰属を特定し得ないものが2点(41, 42)みられる。

鉄製弓飾金具(第17図43~45 図版八)

鉄製の弓飾金具⁽⁷⁾は3点みられる。断面略方形の筒に棒を挿入したもの。筒の両端は四ヶ所の浅い切り込みを入れて四弁の花びら状に短く外反し、棒の両端はこの筒より突出しマッチ棒の頭状を呈している。筒の外面には木質の付着が認められる。より仔細に観察すると木質は四面の内、相対する面に木理が看取される。このことから、この金具は木理に対して直交方向に貫通した孔に挿入されたのち花卉を開いたものと推察される。尚、筒部の長さが微妙に異なる点については、弓の太さに関連するとの見解がある。

番 号	全 長 (cm)	棒頭長×筒長×棒頭長 (cm)	筒 径 (cm)
43	3.2	0.3 × 2.5 × 0.4	0.5
44	3.3	0.6 × 2.2 × 0.5	0.6
45	3.4	0.4 × 2.4 × 0.6	0.5

※数値は最大値

轡(第18図46・47 図版九)

馬具として轡が2組みられる。共に鉄製素環鏡板付轡である。便宜的に轡A、Bと呼称し説明を加える。

轡A(46a~d)鉄製素環の鏡板一組とこれに連結する二連銜で、引手を欠く。aとb、cとdの組み合わせで出土したが、形態が酷似することから同一の轡の部品と判断した。鏡板(a, d)は断面略円形(0.8×0.75cm)の素環で、長径7.7cm、短径6.9cm前後の楕円形を呈す。ともに立聞は基部を残し(幅4.0cm)欠損している。二重銜は、断面隅丸方形で、bの長さ8.8cm(外環径2.4cm、棒状部長4.2cm、内環長2.2cm)、cの長さ9.0cm(外環径2.5cm、棒状部長4.2cm、内環径2.3cm)で、外環の芯々で14.5cmを測る。

轡B(47a~f)は鉄製で、素環の鏡板一組とこれに連結する二重銜、引手からなる。鏡板(a, d)は共に断面が略円形(0.8×0.8cm)の素環で、長径0.8cm、短径7.1cm前後の楕円形で、幅4.0cm、高さ1.5cmの立聞がつく。銜は轡Aと同形態のものでいわゆる二連銜。銹化が激しいが共に断面隅丸方形(0.7×0.8cm)で長さ7.8cm前後で内・外環の径は1.

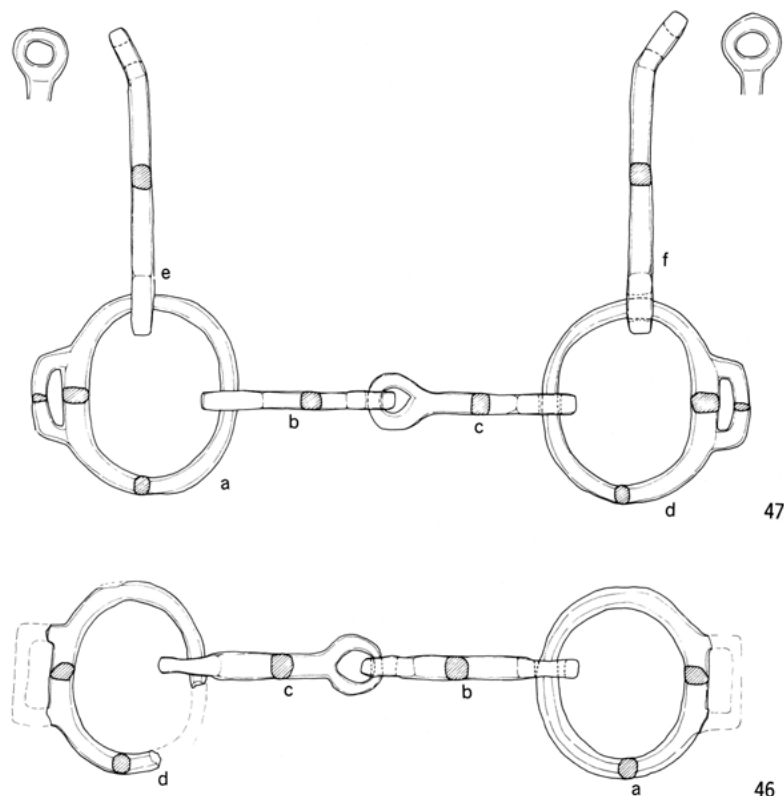
5～2.5cm前後である。引手は長さ13.0cm前後のもので素環の鏡板に連結する。断面隅丸方形（0.9×0.8cm）の棒の両端に円環を有するものでいわゆる引手壺は角度をもって付いている。円環の径はいずれも2.6cm前後である。尚、上記轡Aともに円環における合わせ目は定かでない。あるいは、割り抜いたのかも知れない。

器種を特定し得ない鉄器片（第15図11～14 図版七）

12は、断面方形（0.7×0.4cm）で環状となるもの。現存長5.4cm。表面は剝離が激しい。原形不明。14は、断面円形（0.5×0.5）で、「U」字形の破片、現存長3.5cm、幅3.5cmを測る。鉤具の破片か。11は断面が方形（0.6×0.5）で、一端が直角に屈折し尖頭となり、もう一端は上方へ屈曲し円弧を描いている。鉤具金具の一部かとも考えられるが、一端が尖頭となっており問題がある。13は長さ3.9cm（現存）、幅1.0cm、厚さ0.2cmの板状のもの。上述の刀子皮袋鞘の縁金具片（8）に類似するが、幅が一致しないので原形不明とした。

須恵器（第19図48～56 第21図58～78 図版十）

出土した須恵器には、無蓋高杯（49）、壺（50）、平瓶（48）、提瓶（51）、直口壺（52）、杯蓋（53）、杯身（54～56、58）の他、器形を特定し得ない叩目を有する壺、甕類の胴部片



第18図 下山古墳出土 馬具（轡）実測図（縮尺 $\frac{1}{3}$ ）

が19点みられる。

無蓋高杯 (49) 無蓋高杯は1点みられる。完形で、口径11.8cm、器高14.4cm(杯高5.0cm、脚高9.4cm)、脚下端径10.2cmを測る。杯部は丸味をもった底部から稜を有さずに直線的に立ち上がったのち、口縁端部を短く外反させたもので、端部内面は浅い沈線(凹)がめぐり面取り様に仕上げられている。脚部は、裾部に向って大きくラップ状に開く形態のもので、端部近くで一度緩く内側に屈折している。柱状部の中位やや上方外面に二条の沈線が巡り、その下方に三方向に縦長の長方形透しを有している。脚端部近くの屈折は、この透しの下端の位置と一致している。透しは調整後の器壁にタテに二条の切り込みを入れた後、上下をヨコに切り込み穿っている。脚端部は接地面に対して外縁が垂直となる様に(即ち端部断面逆三角形を呈する)仕上げられている。

脚部の内面の上位(二条の沈線の内面あたりより上位)に絞り目が認められる他は、内外面とも回転ヨコナデ調整である。色調は青灰色~青(赤)灰褐色を呈する。胎土は1mm前後の砂粒をまばらに含む他、概して精良である。焼成は良好。

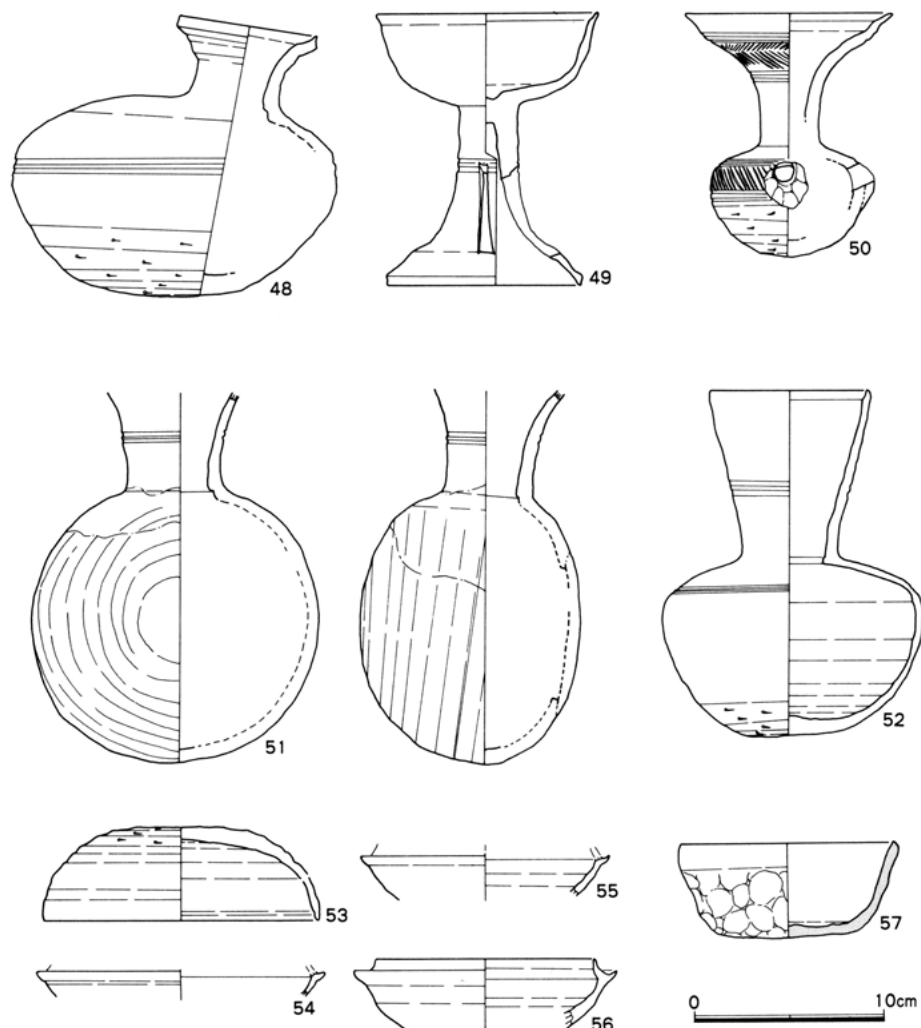
甕 (50) 甕は1点みられる。口縁部を $\frac{1}{2}$ ほど欠く他、頸部以下は完存。口径11.0cm、器高13.0cm(口頸部高7.1cm、体部高5.9cm、胴部径8.4cm)を測る。肩の張った雇球形の体部で肩部及び体部の中位にそれぞれ二条の沈線を囲繞させ、その間に右下りのへら状工具の刺突による斜線列が巡らして紋様帯を構成している。注口の下方に粘土の貼付の造作により、注口部を突出させている。

頸茎部は径3.6cmほどで、体部に対して著しく引き締まっている。口頸部は、基部より2cmほど垂直に立ち上がった後大きく外反もする頸部と屈折して緩く外反しつつ短かく立ち上がる口縁部からなる。口縁端部は丸く仕上げられ、口縁内面は巾広な面取り様に浅い凹線様の沈線が巡っている。頸部と口縁部との接の屈折部にそれぞれ二条を一単位とする沈線が巡り、その間に左下りのクシ状工具の刺突による斜線列が二条、右開きの羽状紋に施されている。色調は(青)灰褐色を呈し口縁部内面及び頸部下方から肩部にかけて一部緑褐色の自然釉がみられる。胎土は1mm前後の砂粒をまばらに含む他、概して精良で、焼成も良好である。体部の下半に回転ヘラケズリ調整が認められる他は、内外面とも回転ヨコナデ調整である。

平瓶 (48) 平瓶は1点みられる。扁球形の体部でその上面の一方に片寄ったところに体部に較べ小ぶりの口頸部が付くもの。口径7.4cm、器高15.0cm、体部最大径17.0cmを測る。完形。体部外面中位やや上方に二条の沈線を囲繞させている。体部上面には、成形に際して用いられた粘土板の接合痕が緩い凹線として看取される。底部は平底に近い丸底である。大きく外反するもので口縁は一段を有してから口縁帯部へと連なるいわゆる「二段

構成」のものであるが、段あまく痕跡的である。口縁内部も顕著な受口をなさず軽くえぐられているにすぎない。体部下半に回転ヘラケズリ調整が認められる他は、回転ヨタナデ調整で仕上げられている。但し、体部と口頸部は回転軸を異にしており、別々に製作された後、結合されたことは明らかである。焼成は不良で器壁は軟弱。灰（赤）褐色～灰（黄）褐色を呈す。胎土は、1mm前後の砂粒をまばらに含む。

提 瓶 (51) 提瓶は1点みられる。一方が丸く膨み、他方が扁平な扁球形の体部の側面に口頸部が付く形態のものである。口縁部を欠く他は完形。口径7.5cm（現存上端）、器



第19図 下山古墳出土 須恵器・土師器実測図 (縮尺1/4)

高19.8cm（現存）、体部幅15.2cm、体部厚11.6cmを測る。（口頸部は、緩く外反するもので、頸部中位外面に二条の沈線が巡る。体部の形状は、上記平瓶のそれと酷似している。扁平な面には、成形に際して用いられた粘土板の接合痕が凹みとして認められる。口頸部は内外面とも回転ヨコナデ調整で、体部は、中心より扁平な面側がヨコナデ調整で丸く膨む側は回転ヘラケズリ調整である。ただ口頸部と体部とは調整の回転軸を異にしており、別々に製作された後結合されたことは明らかである。胎土には微細な砂粒を含む、焼成が良好で、頸基部から体部にかけて降灰（自然）釉がかかる。青灰色～燻黒色を呈す。

直口壺（52） 直口壺は1点みられる。肩の張った扁球形の体部に上方へ軽く開き頸部中位外面に二条の沈線を圍繞させた長い頸部が付くもので、完形。口径8.2cm、器高18.4cm、体部最大径13.6cmを測る。肩部に二条の緩い沈線が巡る。口縁部内部内面は、面取り様に緩い沈（凹）線が巡る。底部は平底に近い丸底で、体部の肩部下から底部にかけて回転ヘラケズリ調整で仕上げられている他は内外とも回転ヨコナデ調整。緻密な胎土で、焼成は良好、自然釉が肩部の一部にかかる。灰（褐）色を呈すが部分的に燻黒色を呈す。

杯 蓋（53） 杯蓋は1個体みられる。同一個体と考えられる頂部片と体部片（両者は接合しない）より推定復元。口径14.5cm、器高5.0cm、円蓋状の頂部と垂下する体部からなる形式のもので、両者の境には緩い巾広の凹線が巡る。口縁端部内面に緩い一条の沈線が施されている。端部は丸く仕上げられている。頂部の約 $\frac{1}{2}$ ほどに回転ヘラケズリ調整がみられる他は内外面とも回転ヨコナデ調整で仕上げられている。1mm前後の砂粒をまばらに含む胎土で焼成は良好、灰色を呈す。

杯 身（54, 55, 56, 58） 杯身は破片で3個体みられる。いずれも丸底で蓋受けのかえりを有する形式のものである。56は底部を欠くもので口径11.5cm、蓋受け基部径で12.9cm、器高4.9cm（現存）を測る⁽⁸⁾。かえりの立ち上がりは短くかなり内傾した後、端部をわずかに垂直ぎみに立ち上がらせている。端部は丸い内外面とも回転ヨコナデ調整で、外表面下部にいわゆる「ぬた痕」が認められる。胎土は良好で器表面には微細な黒色の「吹き出し」が認められる。焼成は良好で色調は（青）灰色を呈す。54, 55は、蓋受けの基部の破片で、その復元値に正確さを欠くきらいがあるが、55は径15.0cm、54は径13.0cmを計る。共に蓋受け部外面と体部との境に緩い沈（凹）線が巡っている。これは56には認められないものである。内外面とも回転ヨコナデ調整で、胎土には微細な砂粒を含む。焼成は良好で（青）灰褐色の色調を呈す。55は法量、胎土からみて杯蓋53と組み合わせ可能性をもつ。なお小片で図示し得ないが、58は杯身の立ち上がり部片で、胎土等からみて55と同一個体と考えられる。

壺・甕類の破片（59～78） 総計で19点を数える。78を除く59～77は、外表面が燻黒色

～青灰色と相違をみせるものの、全片とも、内面は（青）黒色を呈し、しかも外表面に平行叩き目、及びカキメ調整を有し、かつ微細な砂粒を含む胎土で灰色の胎の中心が層状に黒褐色を呈すという共通する特徴をもつことから、同一個体と見做し得るものである。

78は薄手で強い曲線の小片で、茶（赤）褐色を呈する外表面には平行叩き目がみられ灰褐の内面には指圧による凹凸が激しい。胎土は微細な砂粒を含むもので、焼成は良好。器形を特定し得ないが破片のもつ曲線、内面にヨコナデ調整が認められることなどを勘案すると壺類の肩～頸基部の破片かと推察される。

土師器（第19図57 図版十）

出土した土師器は、杯（57）が1点みられる。

杯（57） ほぼ完形で1点みられる。口径11.2cm，器高5.0cm，底径6.5cmを測る。平らな底部と斜め上方へ直線的に開く体部から成るものである。口縁端は丸く尖り気味になっている。底部内外及び口縁部を除く体部外面は、指圧痕が顕著で、いわゆる「手づくね」成・整形調整のまま、体部内面及び口縁部外面は、ヨコナデ調整となっている。底部内面には上から見て中心より左回りの粘土紐巻き上げの痕跡が認められる。胎土は、1～2mm前後の砂粒を含むもので、焼成は悪く、赤褐色を呈し、器壁は脆弱である。

〔注〕

- (1) 永嶋正春「耳環の素材と製作技法について—X線による調査結果を基にして—」（小川貴司編『井上コレクション弥生・古墳時代資料図録』言叢社 1988）
- (2) 森 勇一の鑑定による。
- (3) 刃部の砥ぎ減りが進行した結果とも考えられなくはない。
- (4) 従来この種の鉄器の用途，呼称については諸説があって見解の一致をみない。ここでは渡辺康弘「刀子の拵について」（『史観』115 1986）の意見に依った。
- (5) 図示し得ない茎の端部近の破片が3点みられることを勘案して18本（以上）とした。もっともそれらが図示したものと同一個体の可能性もある。
- (6) 従来「棘状突起」と総称されたもの。ここでは田中新史 「121鉄」（小川貴司編『井上コレクション弥生・古墳時代資料図録』言叢社 1988）の意見に基づき、「方形突起」の呼称を用いた。
- (7) 馬目順一 1979「中田装飾横穴出土の鉄製両頭金具の本来の形態」（『平地学同好会会報（特別号）』）及び田中新史 1979「古墳出土の飾り弓—鋌飾りの弓の出現と展開—」（『伊知波良』1）の見解をもとに、便宜的に「弓飾金具」とした。
- (8) 小片での復元であり、形態からみて口径等の数値が幾分大き目に算出されている感がある。この点については54，55においても同様である。この原因としては遺存部位の焼けひずみ等が考えられる。

第4章 石室使用の石材について

本墳の横穴式石室に使用されている石材について岩質鑑定を行なった。これは、横穴式石室の用材として特定なものが用いられているのか否か、また運ばれてきたものがあるならばその産地はどこか、といったこと等の検討を通じて古墳の造営についての具体相の一端を把握する上での基礎的データの収集を目的としたものである。以下、その所見と派生する二、三の問題点についてふれてみたい。なお、石材の岩質鑑定は現場での肉眼鑑定⁽¹⁾により、両側壁・奥壁・床面の敷石を対象とした。所謂裏込石については行っていない。

1. 石材の種類と使用状況

本墳の石室に用いられている石材の種類は以下の通りである⁽²⁾。

領家花崗岩類

神原石英閃緑石	}	古期花崗岩類
天竜峡花崗岩		
伊奈川花崗岩……………新期花崗岩類		

領家変成岩類

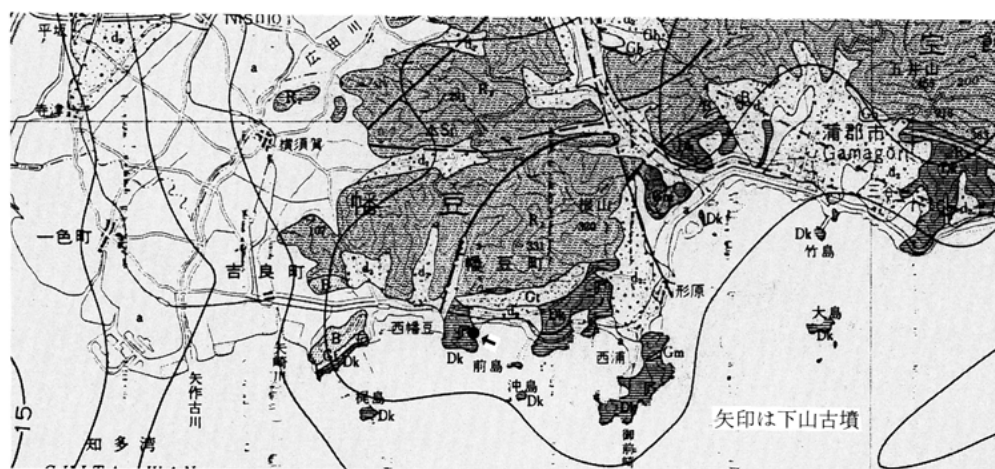
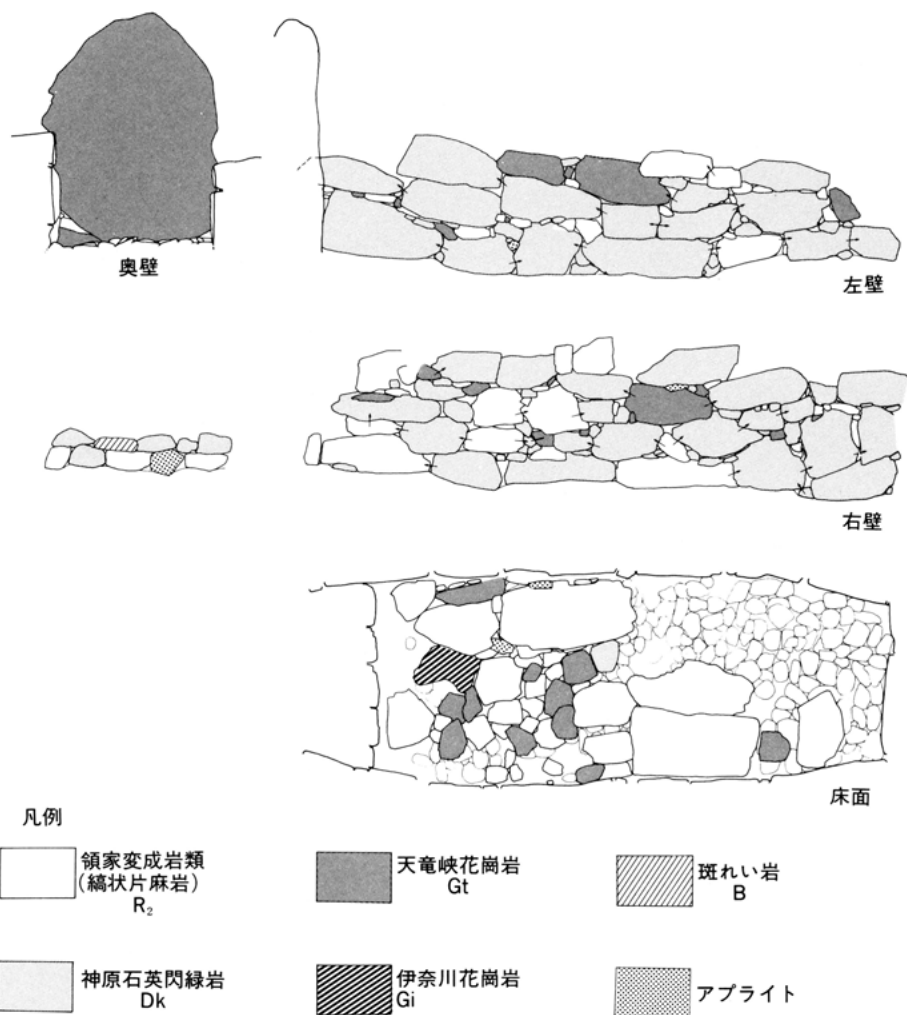
雲母片麻岩・珪質片麻岩（縞状片麻岩）

塩基性岩類

斑れい岩

これら石材の使用状況については第20図に示すとおりである。両側壁についてみると神原石英閃緑岩、天竜峡花崗岩の花崗岩類がほとんどで片麻岩・アブライトは少ない。花崗岩類については神原石英閃緑岩が多用されている。用材について人為的な「加工痕」は看取されないが、多くは片理に直交して割れた面を壁面としている。奥壁についてみると、その壁面の大半を占める所謂「鏡石」に天竜峡花崗岩が用いられている。羨道部と玄室との境に二段に組まれた石組は、斑れい岩およびアブライトが各1点みられるほかはいずれも神原石英閃緑岩である。

次に床面の敷石についてみると第一次床面、第二次床面とでは用材が若干異なる。すなわち、第一次床面においてはすべて片麻岩の河原石（亜角礫）からなり、その間隙（ないし上面）にみられた細かい円礫（中礫、砂利）は片麻岩、石英（上記片麻岩帯にみられる）からなる。第二次床面については、片麻岩（亜角礫）に加え神原石英閃緑岩、天竜峡花崗



第20図 下山古墳 石室使用石材の岩質 (拠 注(2)の文献 縮尺 1/200,000)

岩がみられるほか1点ではあるが伊奈川花崗岩と思われるがみられることは特記される。

なお既述のように3個体分確認された天井石（推定）についてみると、天竜峡花崗岩2個体、神原石英閃緑岩1個体である。

以上石材の使用状況について少しまとめておくと、まず側壁・奥壁（天井部）・羨道部と玄室の境の石組といった部位は基本的には花崗岩類で構築され、床面については一次面が河原石・砂利といった片麻岩等の亜角礫・円礫からなり、二次面が河原石に加え片麻岩および花崗岩類からなる。といった具合に若干の使い分けがみられる。

2. 石材の産地

石材の産地を具体的に特定することは困難を極めるが、本墳の周辺の地質（第20図）からみて次のように整理できよう。

本墳の立地する丘陵は神原石英閃緑岩を基盤とするものであり、これは周辺の山中より産出される。天竜峡花崗岩については、本墳の北方の丘陵に東西に長い帯状に存している。したがって、この石材については丘陵に沿って運ばれたのか、転落石として本墳の立地する支丘陵の麓に存したものを運び上げた等々が想定される。特に奥壁・天井石等に用いる大型の石材として神原石英閃緑岩にはかに天竜峡花崗岩が用いられている点に留意しておきたい。

また床面の片麻岩の亜角礫は、上述の天竜峡花崗岩帯の北側に広く展開する領家変成岩帯の転落石とみなすことが可能であり、事実、麓の小川等で散見される。同じく中礫（砂利）については海岸で採取される。したがってこれらは丘陵下よりはこび上げられたものとみられる。

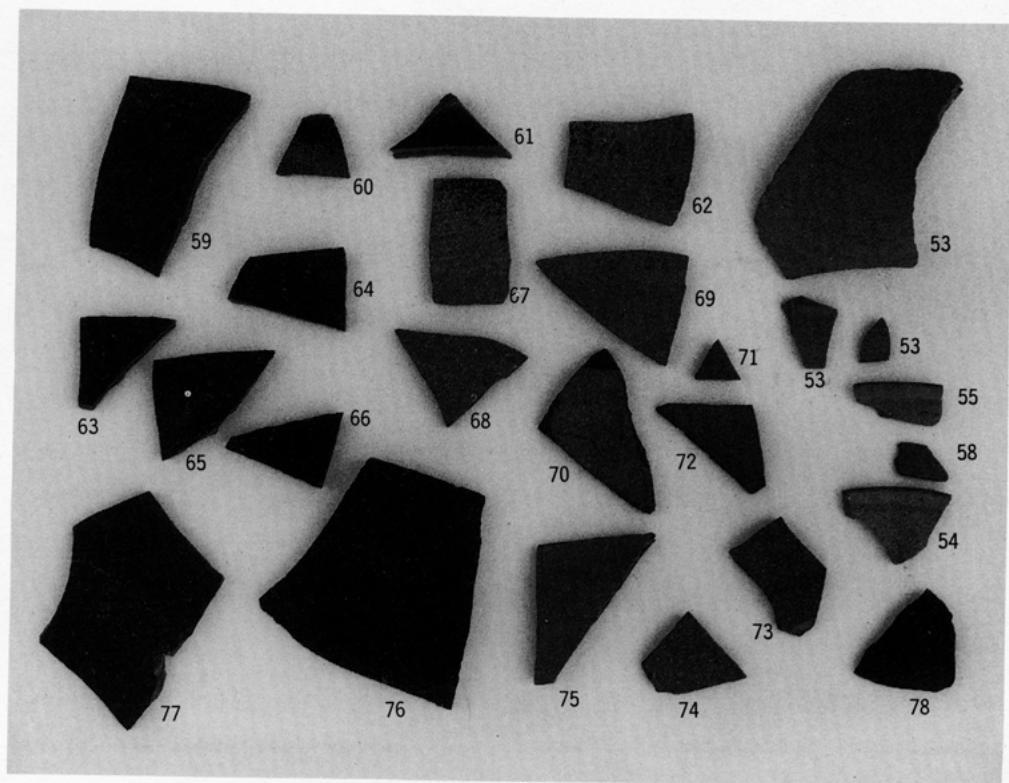
問題となるのは、床面の二次面にみられた伊奈川花崗岩および羨道部と玄室との境の石組中にみられた斑れい岩（各1点）である。ともに現在のところ本墳の存する東幡豆では認められないものである。斑れい岩の至近距離の産地としては、本墳の西方0.4kmのところの幡豆町大字鳥羽の崎山から吉良町大字宮崎にかけての丘陵が指摘される。一方、伊奈川花崗岩は岡崎市の中央部以北の丘陵で産出するものであり、本墳からは約20.0km北ということになる。もっとも後者については、矢作川によって幾分か下流に運ばれるといった状況も想定されるが、いずれにしても斑れい岩および伊奈川花崗岩（であるとすれば）については下山古墳からは数kmから十数kmの搬入を考えなくてはならない。

以上が本墳に使用された石材についての所見および問題点である。現在のところ近在の古墳の石室用材に関する基礎的データを有しないため、他との比較検討を行い得ないが、例えば本墳の北東1.3kmのところに所在するとうて山古墳（第3図12）では三河湾内の佐久

島産の泥岩の組合式石棺がみられるなど後述するようにこの時期には少なくとも海岸部においては石材の広範囲の移動が認められている。その理由はともかくとして本墳の斑れい岩・伊奈川花崗岩(?)を使用した背景として留意する必要がある。

〔注〕

- (1) 森勇一の指導下、永草康次、楯真美子がこれを行なった。但し、石材の表面はひどく風化しており、その鑑定は困難を極めた。
- (2) 岩質の分類は、山田直利他『20万分の1地質図幅豊橋』（通産省地質調査所 1972年）にもとづく。



第21図 下山古墳出土須恵器 壺・甕類片

第5章 後 論

第1節 下山古墳の築造年代について

横穴式石室および出土遺物の検討から本墳の築造年代について、その編年の位置を求めるとともに、併せて関連する若干の問題について言及してみたい。

本墳の内部主体である横穴式石室は、地山面を掘削した方形の掘方内に構築されたもので、平面形は羨道部（横口部とすべきか）と玄室とか区別されない所謂「無袖式」であり、両者は羨道部を一段高められることでこれを区別している。かかる形状は本石室が所謂「堅穴系横口式石室」に属する公算が高いことを示している⁽¹⁾が、天井部及び羨道部の損壊が著しく現状では断定を差し控えるべきであろう⁽²⁾。またこの呼称の採否はともかくとして、上記の特徴を有するこの種の石室が本墳の所在する西三河地方に広く分布することは、すでに先学の説くところである⁽³⁾。ただ本石室で注目されたのは、玄室の平面形——玄室・羨道部の側壁は石積の造作上においても一体となっており、その意味では羨道部をふくめた平面形——が胴張り形を呈した点である。1988年1月に西三河地方の横穴式石室の類型区分を行なった加納俊介の分類案⁽⁴⁾では、この種の石室（加納分類の「3無袖類 a 框構造有」）の平面形としては「長台形A」、「長方形」があげられるにとどまっており、本石室が胴張り形を呈していたことは、これに新たな知見を加えることになったものといえる。また奥壁の造作が「縦長1石」⁽⁵⁾からなるものもこの種の石室では初出例である。問題となる本石室の編年の位置づけであるが、玄室が胴張り形を呈し、奥壁が「縦長1石」の造作よりなるという点は、西三河地方に例数の多い所謂玄門立柱石を有する横穴式石室では新しい様相として捉られる要素である⁽⁶⁾。こうした点等からみて、本石室はこの種の石室（3、無袖類 a 框構造有）のなかではもっとも新しい様相をなすものとして捉えられよう。

次に目を転じて、出土遺物についてみてみることにする。既述のように出土遺物は全て石室内出土のもので副葬品とみられる。その品目は各種みられるが、ここではその編年研究がすすんでいる須恵器を取り上げることとしたい。出土した須恵器は、高杯・甗・平瓶・提瓶・直口壺・杯蓋各1個体・杯身3個体および壺・甗類の胴部片19点である。出土状況等からみてこれらが本墳に副葬された全てのものであるとみることは出来ず、また同一時期の副葬とみなすこともできない。こうした点をふまえて以下検討を加えることにする。

まず個々の型式学的特徴についてみていくことにする。

無蓋高杯(49)は、脚の中位やや上方に2条の沈線がめぐりあたかも長脚二段透しを意図したようにみられるが、穿孔は下段部に三方透しが穿たれるにすぎない。甗(50)は、比較的肩の張った小型の体部で底外面は丸底様に回転ヘラ削り調整で仕上げられ、注口はその下半部に粘土を貼付し突出させている。柱状は頸部は幾分短くなっている。平瓶(48)は、口縁部が所謂「二段口縁」となっているがその造作はあまく形骸化している。底外面は平底に近い丸底に回転ヘラ削り調整されている。提瓶(51)の体部は平瓶のそれに類似しており、体部の偏平な側はゆるやかな曲線を描くにとどまる。長口壺(52)は、体部の肩が張っているものの明確な稜をなすものではなく、底部外面は平瓶と同様の仕上げが施されている。杯はいずれも遺存状態が悪い。杯身(54・56)は小型で、立ち上がりは短く内傾している(56)。55の杯身は幾分大ぶりで、蓋受けの外面に沈線状の凹みがめぐる。杯蓋(53)は、口径14.5cmと幾分大ぶりで、法量的には55と対をなすが、胎土等は若干異なる。円蓋状の頂部からはほぼ単一曲線を描いて口縁部にいたるが、途中で所謂「庇」の痕跡と考えられる緩く幅広の凹線がめぐる。壺、甗類の体部片20点については、その編年の位置をきめる特徴を見い出せないが、また上記の須恵器の編年観と大きくする要素も認められない。

これら須恵器について、その編年の位置を檜崎彰一の編年観、年代観⁽⁷⁾を援用して求めるならば、杯身(55)、杯蓋(53)および甗(50)に先行型式の様相が一部認められるものの、総じて第Ⅱ期第4小期(浅井期)に比定される。そしてその実年代については7世紀の第2四半期があてられる。

このほかに頸部に方形突起を有する細根の長頸甗を主体する鉄甗⁽⁸⁾等の出土遺物や上記の横穴式石室の形態は、これら須恵器と同じ時期の所産と考えても特に矛盾を生じるものは特にない。従ってこの須恵器の編年観、年代観をもって本墳の築造年代としてさしつかえないものとする。

第2節 被葬者像について

本墳は、第1章で述べたように東に大字東幡豆の小平野を望む一支丘陵上に立地し、開口部の眼下には三河湾が一望される。これらのことから本墳の被葬者は、この東幡豆の小平野に居所を構え生業の一端に海との関わりをもっていた⁽⁹⁾であろうことは容易に予想されるところである。がしかしこれは想像の域を越えるものではない。考古学の上で被葬者像を推測しようとすることは容易なことではなく、いきおい状況証拠の提示にとどまる場合

第2表 組み合わせ式石棺を有する古墳

番号	古墳名	所在地	備考
1	とうて山古墳	幡豆郡幡豆町大字東幡豆	本文注①②の文献
2	下山古墳	〃 〃 〃	〃
3	講伏古墳	〃 〃 〃 西幡豆	〃
4	西川原古墳	〃 〃 〃	幡豆町誌編集委員会『愛知県幡豆町誌』 1958年
5	山ノ神塚古墳	〃 一色町大字佐久島	一色誌編集委員会『佐久島の古墳』（一色町誌資料第1輯） 1967年
6	平古第3号墳	〃 〃 〃	同 上
7	北地第5号墳	知多郡南知多町日間賀	南知多町教育委員会『日間賀島の古墳』（南知多町文化財調査報告書 第二集） 1977年
8	北地第8号墳	〃 〃 〃	同 上
9	神明社古墳	渥美郡田原町	渥美郡田原町史編集委員会『田原町史 上巻』 1971年
10	竈池古墳	〃 〃 〃	同 上
11	窪地古墳	岡崎市細川町字窪地	岡崎市教育委員会『窪地古墳・鳥ヶ根古墳』 1976年
12	新美古墳	渥美郡田原町	(参考) 9と同じ文献
13	石田第1号墳	岡崎市細川町字石田	(参考) 木村里美『岡崎市石田1・2号墳調査概報』（『岡崎市史研究』 第8号）1986年

第3表 佐久島産石材の使用古墳（佐久島を除く）

番号	古墳名	所在地	備考
1	とうて山古墳	幡豆郡幡豆町大字東幡豆	石 棺 材 第2表 参照
4	西川原古墳	〃 〃 〃 西幡豆	〃
14	西山古墳	幡豆郡吉良町大字小山田	天井石他 吉良町教育委員会『岩場古墳』（吉良町史料第1輯） 1957年
15	宝冠塚古墳	西尾市刈宿町	側 壁 松井直樹『宝冠塚古墳』（『愛知県埋蔵文化財情報1 昭和59年度』）愛知県教育委員会・（財）愛知県埋蔵文化財センター



第22図 組み合わせ式石棺出土古墳等分布図（番号は、第2・3表に一致）

が多く、本墳に関しても成案を得るにいたっていない。そこでいささか不十分ではあるが、以下において調査所見をもとにして考えられるところの一端を箇条書きして、被葬者像再考のための覚書きとしてまとめるにとどめたい。

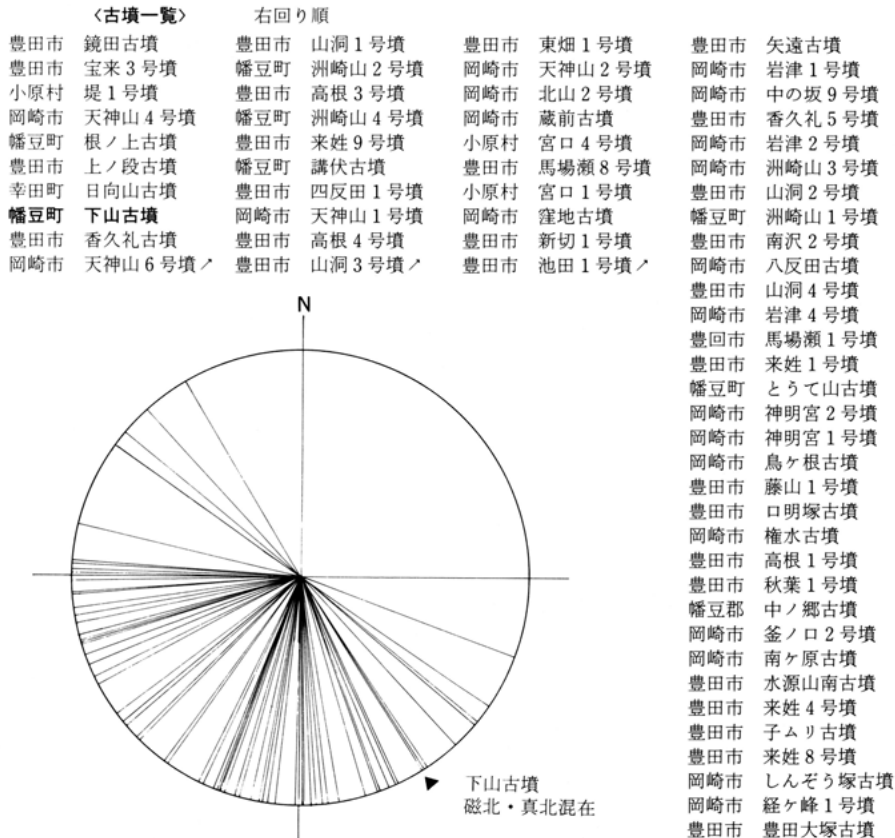
- 1) 玄室床面の敷石が二面認められることからみて、本墳の被葬者は複数を数えるものと考えられる。そしてその場合には第一次床面の奥壁前の右壁沿いの部分、組み合わせ式石棺、第二次床面敷石の奥壁側端の右壁沿い部分に存す大型石上を「棺」の位置として予想し得るかも知れない。もっとも追葬によるいわゆる「片付け」の問題は残るが。
- 2) 出土した須恵器の型式による限りでは、初葬から追葬の終止までの期間は一型式前後（あえて示せば25年前後⁽¹⁰⁾）と短かったものと推察される。
- 3) 本墳から東に望まれる大字東幡豆の小平野は、西・北・東側に丘陵に囲まれ、南側は海に面しており、地理的には一種の小空間をなしている。この三方を囲む丘陵上には、本墳をはじめとする古墳時代後期の円墳が数多く分布している。その分布は一支丘上に5基を越えて集中することではなく、顕著な“群集墳”の形成をみない。本墳においても同一支丘陵上には一箇所（西方へ約70mの地点）に古墳とおぼしき石組様のものを認めるにすぎない。
- 4) また、東幡豆の小平野を望むこれらの古墳の内部主体である横穴式石室の形態は様々である⁽¹¹⁾。この相違は被葬者像をもとめる上で注目に値するのもかも知れない。如何なる石室の形態を採用するかということにあたっては（生前の）被葬者ないし造営者の自由な選択によった、被葬者の社会的立場によって選択された、あるいは被葬者ないし造営者の出自等の系譜に起因するものであった等々が考えられるが、これまたいずれも想像の域をこえるものではなく、残念ながら現段階では石室の形態の相違が具体的に何を物語るのが定かにし得ない。今後の研究の進展を待ちたい。ちなみに本墳と同形態に属する横穴式石室を求めるならば、州崎山第1号墳（第3図22、檜崎編年の第Ⅱ期第1小期—福田期—）があげられる。
- 5) 本墳の石室内には所謂組み合わせ式石棺がみられた。この種の石棺はしばしば注意されてきた⁽¹²⁾ように、6世紀後半代から7世紀中葉にかけての時期、(a)三河湾内の島々ならびに(b)沿岸の旧幡豆郡および(c)渥美郡にかけての地域に特徴的に分布するほか、近年の調査で(d)岡崎市北部に分布することが知られるようになってきた。第22図にみるようにその分布は大きく(a)～(d)の四つに大別される。本墳はいうまでもなく(b)に属するもので、組み合わせ石棺を用いるという共通の墓制を有するという点を重視するならば、本墳の被葬者をとりまいていたいわば社会的環境の一端が知られることになり、ひとまずかかる(b)地域の動向のなかで本墳は理解される必要が生じよう。なお、この組み合わせ式石棺

の構造・配置等には少なからず小異が認められ、その点について今後検討の必要がある。

6) 上記に関連して参考までに付記するならば、この時期に三河湾内の佐久島産の泥岩が旧幡豆郡南部（西尾市刈宿町、幡豆郡吉良町、同幡豆町）の古墳の石室用材としてあるいは石棺材として用いられていることが知られている。これは先でふれた(a)地域と(b)地域で石材をめぐる海上交易があったことを示しており、かつ当該古墳に組み合わせ式石棺を有するものがみられる点は興味を引く。この点に関連していえば、藤原京・平城京出土の木簡から三河湾内の篠島、日間賀島、佐久島が律令制下において幡豆郡（波豆評）に属していたことが知られている。殊に三河湾内のこれら島々が幡豆郡に所属していたことは、地理的にみて不可解なきらいがあった。しかしながらこうした組み合わせ式石棺の分布、佐久島産石材の搬出・入のあり方は「波豆評」の成立前史を考える上で、多分に示峻的であり注目に値するが、いまは指摘するにとどめておきたい。

〔注〕

(1) 土生田純之「第4章 3、石室の系統」(『西二河の横穴式石室 資料編』愛知大学日本史専攻会考古学



第23図 西三河の横穴式石室 開口方位

- 部会 1988, 1) 土生田純之「西三河の横穴式石室」(『古文化談叢』第20集(上) 九州古文化研究会 1988, 11)
- (2) 「この種の石室(堅穴系横口式石室・筆者)の最大の特徴は、羨道と前壁をもたないことにある。すなわち、玄室の前に側壁を設定するようになっても天井石は架けられず、形式変遷の最後の段階まで明確な羨道は設けられない。」(土生田純之「九州の初期横穴式石室」『古文化談叢』12集 九州古文化研究会 1983) という指摘がある。
- (3) 注(1)の文献
- (4) 加納俊介「第4章 1, 石室の形状」(『西二河の横穴式石室 資料編』愛知大学日本史専攻考古学部会 1988, 1)
- (5) 前掲注(4)の文献
- (6) 前掲注(1)の文献等
- (7) 橋崎彰一「後期古墳時代の諸段階」(『名古屋大学文学部十周年記念論集』名古屋大学文学部 1958)
橋崎彰一『日本原始美術 6』講談社 1966
橋崎彰一『日本の陶磁古代中世編 1』中央公論社 1976
- (8) この「方形突起の普遍的出現は須恵器編年TK10期に認められる」(田中新史一「121鉄」『井上コレクション』弥生, 古墳時代資料図録』言叢社 1988, 6) という。
西三河地方における鉄鏃の研究は現在のところ皆無に近いが、次のように概観できようか。
西尾市五砂子山古墳出土例が最も古くに位置づけられるもので、茎の短いいわゆる定角式・類柳葉式のものがみられ、おそらくは4世紀代に比定されるものであろう。次いで5世紀代の資料としては、幡豆郡吉良町岩場古墳(5世紀中葉 TK73)、岡崎市経ヶ峰第1号墳(5世紀後葉 TK208)があげられるが、ともに明確な長頸鏃の出土をみない。6世紀前半代(陽徳寺・岡期≒MT15)の豊田市豊田大塚古墳では、長頸鏃の出土をみるが、頸部(茎の境)にはいわゆるスカート状の広がりとなっている。方形突起の出現は6世紀後半代で、豊田市秋葉山第1号墳、豊田市高根第1号墳(福田期≒TK10)などがあげられる。以後7世紀中葉にかけて方形突起を有する細根の長頸鏃が主流をなす。ただ7世紀末葉の岩塚期においては、現在とところ豊田市堅尾古墳群、岡崎市天神山2・6号墳のように鉄鏃の出土をみない。
- 五砂子山古墳 西尾市東浅井町 西尾市編纂委員会『西尾市史 一』 1973年
- 岩場古墳 幡豆郡吉良町大字小山田 吉良町教育委員会『岩場古墳』(吉良町史資料 第1輯) 1957年
- 経ヶ峰第1号墳 岡崎市丸山町
岡崎市教育委員会『経ヶ峰第1号墳』1981年
- 豊田大塚古墳 豊田市河合町
豊田市教育委員会『豊田大塚古墳発掘調査報告』 1965年
- 秋葉山第1号墳 豊田市秋葉町
- 高根第1号墳 豊田市秋葉町
豊田市郷土資料館 『豊田市埋蔵文化財調査集報 第一集 古墳I』(豊田市郷土資料館研究報告)
豊田市教育委員会 1974年
- 堅尾古墳群 豊田市野見山町
豊田市郷土資料会 『豊田市埋蔵文化財調査集報 第三集 古墳II』(豊田市郷土資料館報告10) 豊田市教育委員会・豊田市郷土史研究会 1977年
- 天神山2・6号墳 岡崎市真福寺町 愛知県立岩津高等学校『岡崎市天神山古墳群』 1969年

- (9) 横穴式石室の開口方向が海に向っていることを根拠として、被葬者を海と関連させて考えることはいささか短絡的といえる。西三河地方の横穴式石室の開口方向を調べた結果が第23図である。この図は年代、磁北・真北は不問としており作成上の問題をもつが、これより西三河地方では南東～南～北西方向を開口方向としていることが知られる。本墳の位置では、南東方向から真南方向に開口部を向けた場合は三河湾を望むこととなり、南より北西方向の場合は立陵を望むこととなり展望は悪くなる。したがって、必然的に海を望む方向に開口部を設定するにいたったと解することもできるのである。
- (10) 注(7)の文献
- (11) 紙幅の都合で実測図の掲載をはたし得ないが下記の文献を参照されたい。
- 洲崎山第1～4号墳
 愛知県教育委員会『県立児童総合遊園内埋蔵文化財調査報告』 1971年
 根ノ上古墳 講伏古墳
 幡豆郡幡豆町教育委員会『愛知県幡豆郡幡豆町根ノ上古墳・講伏古墳発掘調査報告書』 1986年
 とうて山古墳
 愛知大学日本史専攻会考古学部会『西三河の横穴式石室 資料編』1988年
- (12) 柴垣勇夫「東海 of 古墳」(『古代の日本』 角川書店 1970年)
 土生田純之「古代志摩の領域に関する試論」(『古代史の研究』第6号 1984年)などがあげられる。
- (13) 底石の有無・小口面を側壁で代用させたもの、石室主軸に対して直交させて設置させたもの、主軸に併行させて置いたもの等々の相違である。

48 第1節 下山古墳の築造年代について

「付表 出土遺物登録番号一覧表」

御愛知県埋蔵文化財センターにおける遺物登録番号である。なお下山古墳の遺跡登録番号はⅢH S-63-S Z01である。

挿 図	遺物番号	遺 物 名	登録番号	挿 図	遺物番号	遺 物 名	登録番号
第15図	1	金環	63-M-01	第17図	40	鉄鏃（細根 長頸鏃）	63-M-34
〃	2	管玉	63-S-01	〃	41	〃	63-M-35
〃	3	ガラス小玉	63-X-01	〃	42	〃	63-M-36
〃	4	〃	63-X-02	〃	43	鉄製弓飾金具	63-M-37
〃	5	〃	63-X-03	〃	44	〃	63-M-38
〃	6	〃	63-X-04	＊	45	〃	63-M-39
〃	7	〃	63-X-05	第18図	46	馬具（轡 引手欠）	63-M-40
〃	8	刀子鞘金具	63-M-02	〃	47	馬具（轡）	63-M-41
〃	9	〃	63-M-03	第19図	48	須恵器 平瓶	63-E-01
〃	10	〃	63-M-04	〃	49	〃 高杯	63-E-02
〃	11	用途不明鉄器片	63-M-05	〃	50	〃 甗	63-E-03
〃	12	〃	63-M-06	〃	51	〃 提瓶	63-E-04
〃	13	〃	63-M-07	〃	52	〃 直口壺	63-E-05
〃	14	〃	63-M-08	〃	53	〃 杯蓋	63-E-06
〃	15	鉄製鏢片	63-M-09	〃	54	〃 杯身	63-E-07
〃	16	〃	63-M-10	〃	55	〃 〃	63-E-08
〃	17	鉄製鏃	63-M-11	〃	56	〃 〃	63-E-09
〃	18	鉄刀	63-M-12	〃	57	土師器 杯	63-E-10
〃	19	鉄刀（鏃・鏢付）	63-M-13	第20図	58	須恵器杯身片 54と同一個体	63-E-11
第16図	20	鉄刀子（把縁金具付）	63-M-14	〃	59	須恵器 壺・甗類片	63-E-12
〃	21	〃 〃	63-M-15	〃	60	〃 〃	63-E-13
〃	22	鉄刀子	63-M-16	〃	61	〃 〃	63-E-14
〃	23	〃	63-M-17	〃	62	〃 〃	63-E-15
〃	24	〃	63-M-18	〃	63	〃 〃	63-E-16
第17図	25	鉄鏃（広根）	63-M-19	〃	64	〃 〃	63-E-17
〃	26	鉄鏃（細根 長頸鏃）	63-M-20	〃	65	〃 〃	63-E-18
〃	27	〃	63-M-21	〃	66	〃 〃	63-E-19
〃	28	〃	63-M-22	〃	67	〃 〃	63-E-20
〃	29	〃	63-M-23	〃	68	〃 〃	63-E-21
〃	30	〃	63-M-24	〃	69	〃 〃	63-E-22
〃	31	〃	63-M-25	〃	70	〃 〃	63-E-23
〃	32	〃	63-M-26	〃	71	〃 〃	63-E-24
〃	33	〃	63-M-27	〃	72	〃 〃	63-E-25
〃	34	〃	63-M-28	〃	73	〃 〃	63-E-26
〃	35	〃	63-M-29	〃	74	〃 〃	63-E-27
〃	36	〃	63-M-30	〃	75	〃 〃	63-E-28
〃	37	〃	63-M-31	〃	76	〃 〃	63-E-29
〃	38	〃	63-M-32	〃	77	〃 〃	63-E-30
〃	39	〃	63-M-33	〃	78	〃 〃	63-E-31

版 図



上 下山古墳遠景（北より）

下 下山古墳遠景（南より）



上 発掘前全景（西より）

中左 発掘調査前（南より）

下左 作業風景

中右 発掘調査前（東より）

下右 石室内埋土



上：墳丘と石室（南より）

中左：墳丘西部

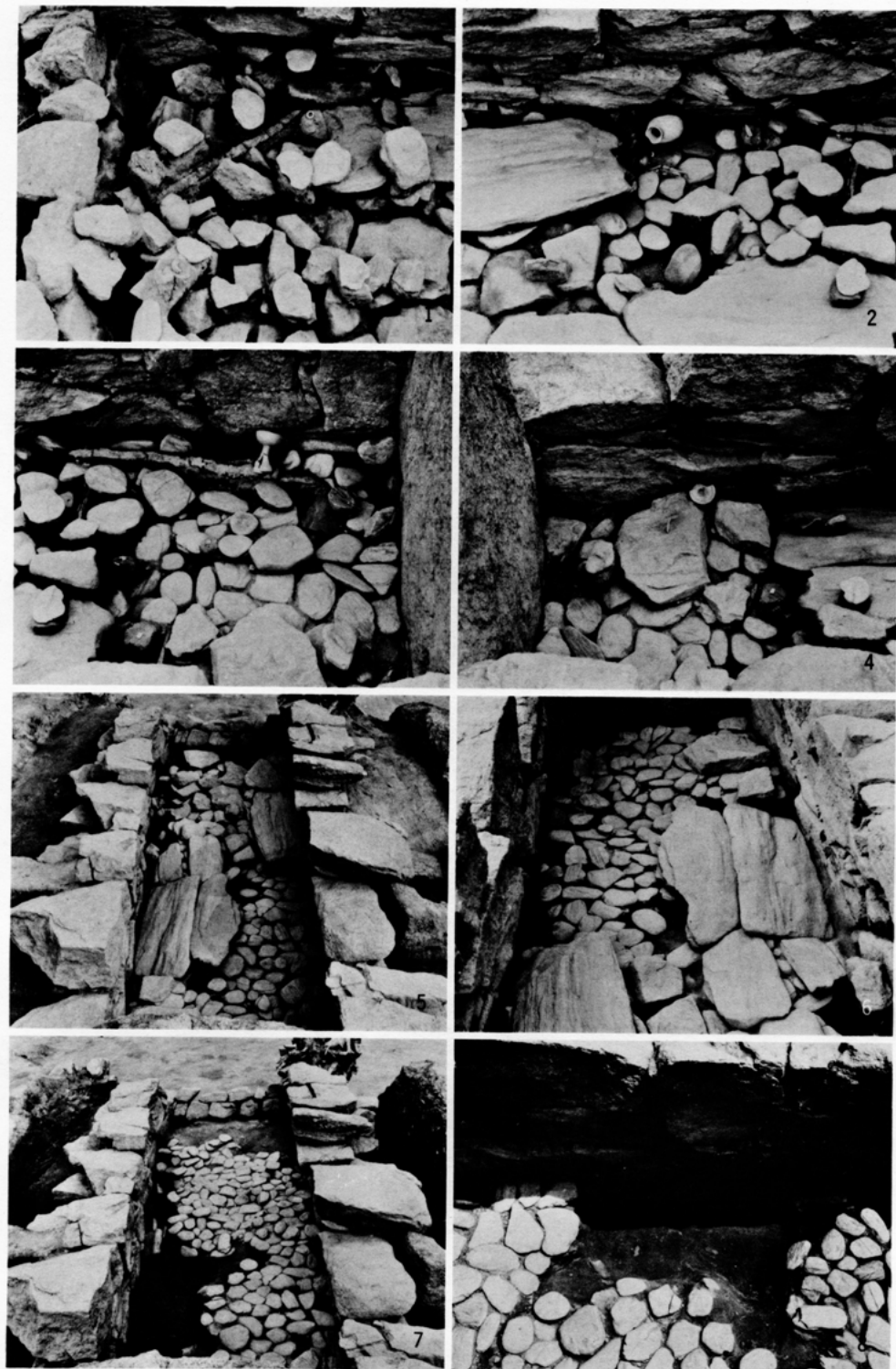
中右：墳丘東部

下左：墳丘全景（西より）

下右：周溝埋土



上：横穴式石室（第二次床面）
下：横穴式石室（第一次床面）



1～4 遺物出土状態 5 第二次床面（奥より） 6 組み合わせ式石棺（南より）
7 第一次床面（奥より） 8 第一次床面（石棺取り除き後）



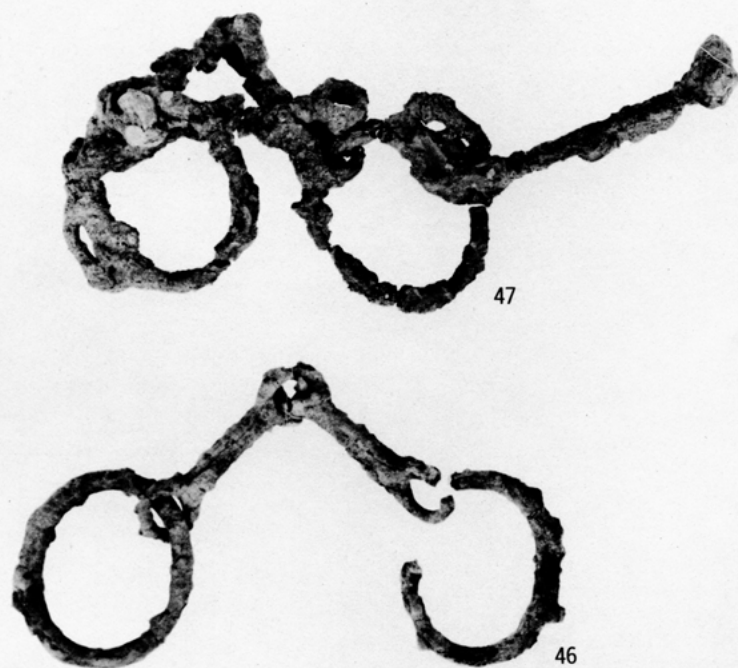
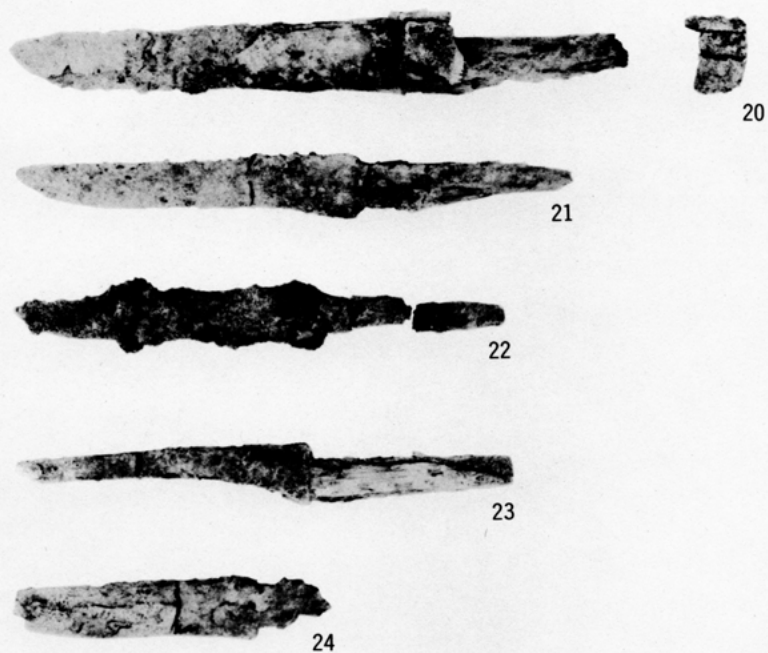
1 右壁 2 左壁 3 玄室と羨道部の境 4 左壁（背後より）
5 敷石除去後 6 左壁裏込土（南より） 7 基底石 8 石室の掘形



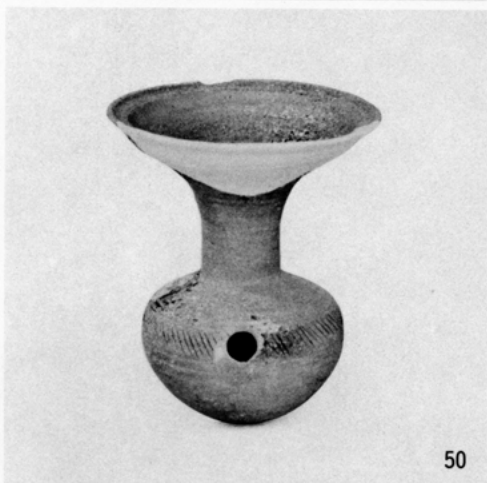
出土遺物 (1) $\frac{1}{2}$ (18・19のみ $\frac{1}{8}$)



出土遺物 (2) 1/2



出土遺物 (3) 上 $\frac{1}{2}$ 下 $\frac{1}{4}$



愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第6集

下 山 古 墳

1989年3月31日

編集 財団法人
発行 愛知県埋蔵文化財センター

印刷 西濃印刷株式会社
